

山梨県北巨摩郡高根町

西 原 遺 跡  
当 町 遺 跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

高根町教育委員会

峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡高根町

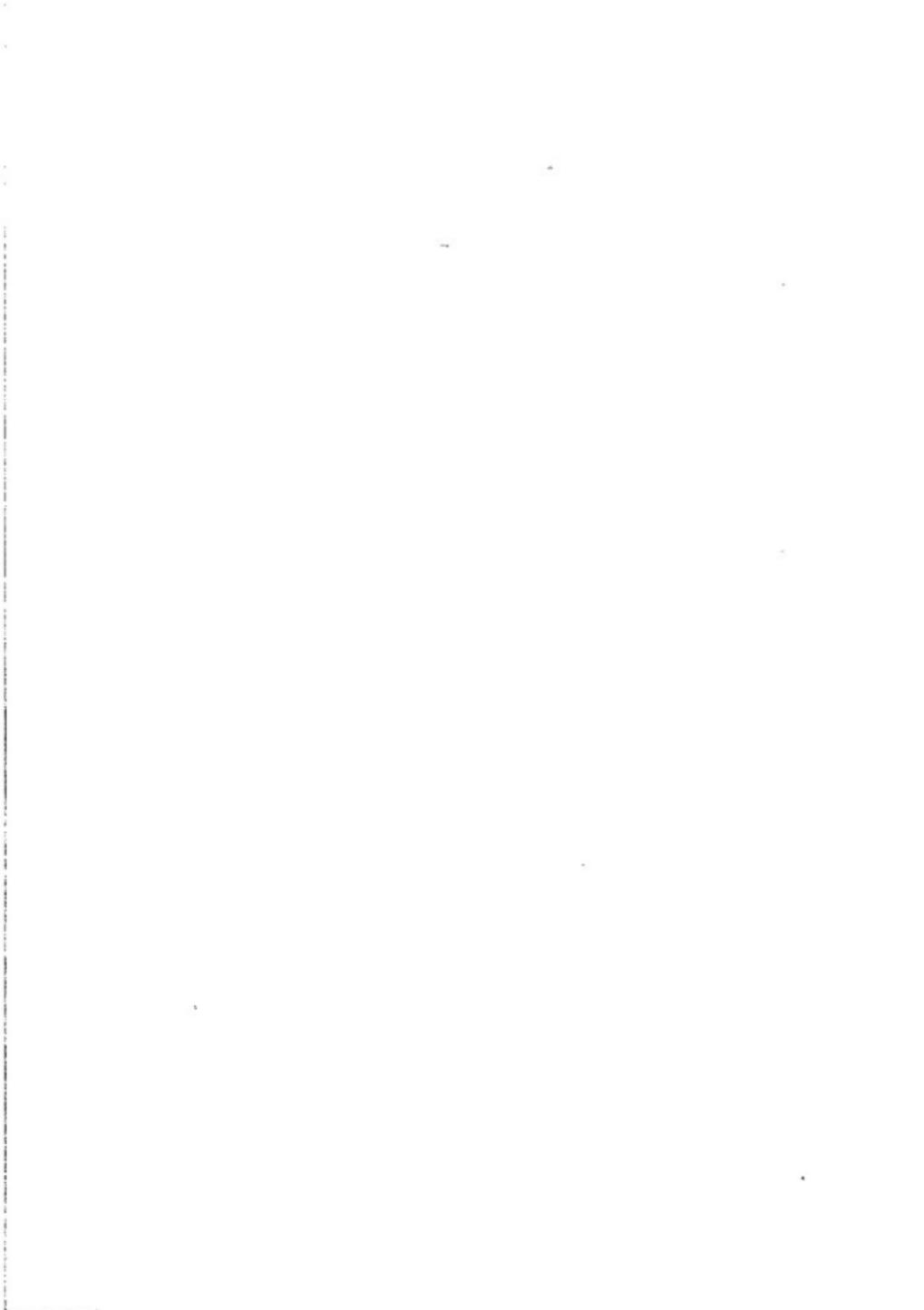
# 西原遺跡 当町遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

高根町教育委員会

峡北土地改良事務所



## 序 文

本書は、昭和62年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された西原・当町遺跡の報告書であります。

高根町は、八ヶ岳南麓に広がる雄大な自然に恵まれ、有史以来人々の暮らしが連綿と営まれ、数多くの歴史、文化遺産を残し今日の私達に語りかけてきます。

先土器時代の丘の公園14番ホール遺跡、縄文時代後、晩期の集落と配石遺構の青木・石堂B遺跡、平安時代の集落址の東久保遺跡。郡衙跡と思われる湯沢遺跡又、旭山墓址、蘿原の鎧堂等の中世遺構など、様々な時代のものが、様々な形で散在しております。

私達が、これらの文化財を通して、現代人が忘れ去った祖先の生活の一部を垣間見、そこから学ぶべきことは数知れません。

しかし、近年開発の波に押され貴重な文化財が破壊されているのも事実です。今一度原点に返り、過去の積み重ねにより、現在の私達が暮らしている事も忘れてはなりません。

今、出来る事は、これら文化財の保護、保存をし、永く後世に伝えていくことだと思います。

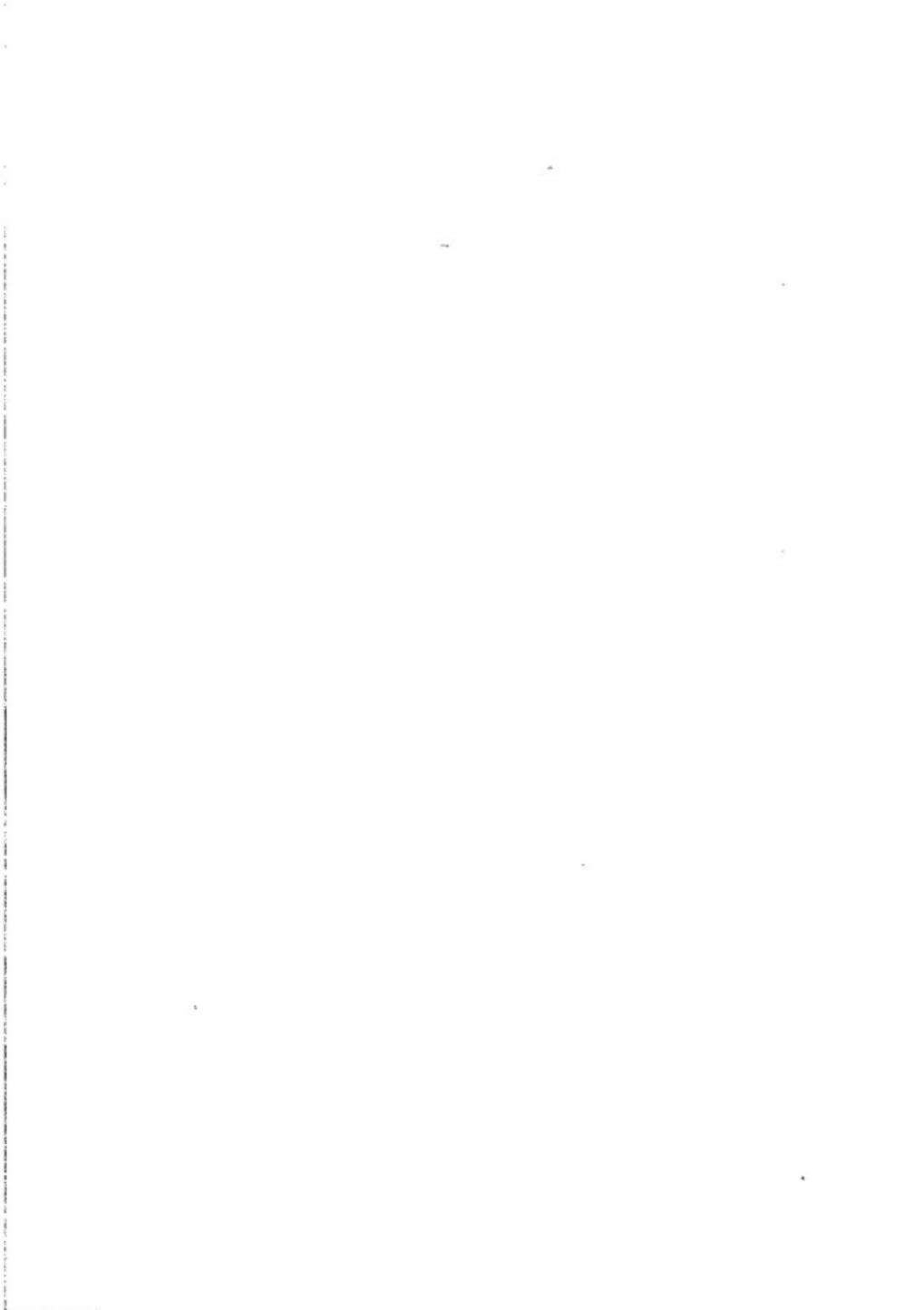
記録保存という形にはなりましたが、西原遺跡からは、縄文時代中期・平安時代の住居址、近世の土塙墓等が、又、当町遺跡からは縄文・弥生・平安・中世の遺物と、近世の土塙墓が発掘調査され、多大な成果を上げることが出来ました。

終に今回の調査に御協力、御指導いただいた、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

昭和63年 3月31日

高根町教育委員会

教育長 中嶋新蔵



## 例　　言

1. 本書は、昭和62年度禁宮園場整備事業に伴う、西原・当町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、峠北土地改良事務所との負担協定及び文化庁・山梨県より補助金を受けて、高根町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の諸先生方・諸機関より御指導・助言を頂いた。

記して感謝申し上げる次第である。（順不同、敬称略）

新津健、末木健、田代孝、坂本美夫、八巻与志夫、保坂康夫、山路恭之助、深沢裕三、

山下孝司、谷口彰男、坂本近一、県文化課、県埋蔵文化財センター、峠北土地改良事務所

4. 発掘調査によって得られた出土遺物・記録図面及び写真等は、高根町教育委員会で保管している。

### 5. 発掘調査組織

調査主体………高根町教育委員会

調査担当……………雨宮正樹

調査補助員……………榎本　勝

事務局……………中嶋　靖、小沢安照、原　一元、島　正樹

### 6. 発掘調査参加者（順不同、敬称略）

八巻栄、八巻久子、八巻智子、原智里子、川端下圭子、佐藤法子、有賀幸子、大芝妙子、  
横森たかね、有賀五郎、原敦、川端下茂男、原藤まさみ、坂本徳津美、原藤栄、浅川花子、  
白倉かつ子、浅川幸子、植松幸子、浅川みえ子、坂本礼子、坂本明子、坂本真、田中恒子、  
半田満春、坂本茉子、植松梅子、有賀公二、五味勇樹、

### 7. 遺物整理参加者（順不同、敬称略）

有賀公二、高柳静香、佐藤法子、植松梅子、中嶋まゆみ、大塚美智子、高橋さとみ、  
清水美咲、坂本美恵、堀直子、小林かおり、坂本芳美、

## 凡　　例

1. 遺構エレベーション・セクション図において、水平線横の数字は海拔高度（m）を示す。
2. 土器実測図において、内面にスクリーントーンのあるものは内面黒色土器を、断面が黒く塗られているものは須恵器を、断面にスクリーントーンのあるものは灰釉陶器をそれぞれ表す。

# 目 次

序 文	5. 近世陶器.....	40
例 言	V 小 括.....	40
第Ⅰ章 調査状況	第Ⅲ章 当町遺跡.....	44
I 調査に至る経緯と経過.....	I 概 要.....	44
II 遺跡の立地と環境.....	II 住居址.....	44
III 周辺の遺跡.....	1. 第1号住居址.....	44
IV 調査方法.....	III マウンド.....	47
第Ⅱ章 西原遺跡.....	IV 土壙墓.....	47
I 概 要.....	1. 1号土壙墓.....	47
II 住居址.....	出土遺物.....	47
1. 第1号住居址.....	2. 2号土壙墓.....	48
出土遺物.....	出土遺物.....	48
2. 第2号住居址.....	3. 3号土壙墓.....	48
出土遺物.....	出土遺物.....	48
3. 第3号住居址.....	4. 4号土壙墓.....	48
出土遺物.....	出土遺物.....	49
III 性格不明遺構.....	V グリッド出土遺物.....	49
1. SX-1.....	1. 繩文時代の遺物.....	49
出土遺物.....	(1) 土 器.....	49
IV 土 壙.....	(2) 石 器.....	58
1. 第1号土壙.....	2. 弥生時代の遺物.....	58
2. 第2号土壙.....	3. 中世の遺物.....	60
3. 第3号土壙.....	(1) 土師・土師質.....	60
4. 第4号土壙.....	(2) 瓦 質.....	60
5. 第5号土壙.....	(3) 陶 器.....	63
V 溝 .....	(4) 青 磚.....	63
1. 第1号溝.....	4. 近世の遺物.....	63
VI グリッド出土遺物.....	VI 小 括.....	63
1. 繩文時代の遺物.....	第4章 総 括.....	64
2. 平安時代の遺物.....	1. 繩文時代の様相.....	64
3. 須恵器甕.....	a 遺 構.....	64
4. 鉄 器.....	b 遺 物.....	64

c グリッド出土遺物	64	4. 中世の様相	65
2. 弥生時代の様相	64	a 遺物	65
a 遺物	64	5. 近世の様相	65
3. 平安時代の様相	65	a 遺構	65
a 遺構	65	b 遺物	66
b 遺物	65	6. その他	66
C 墓書土器	65	引用・参考文献	66

## 挿図目次

第1図—遺跡位置図	10	第24図—グリッド出土縄文土器実測図	32
第2図—周辺地形図	11	第25図—グリッド出土石器実測図	33
第3図—西原遺跡全体測量図	13	第26図—グリッド出土石器実測図	34
第4図—1号住居址実測図	14	第27図—グリッド出土石製品実測図	34
第5図—1号住居址地床炉及び埋甕実測図	15	第28図—グリッド出土土師・須恵器実測図	37
第6図—1号住居址出土土器実測図	16	第29図—グリッド出土須恵器・鉄鐵実測図	38
第7図—1号住居址出土土器実測図	17	第30図—グリッド出土近世遺物実測図	39
第8図—1号住居址出土土器実測図	18	第31図—当町遺跡全体測量図	43
第9図—1号住居址出土石器実測図	18	第32図—1号住居址実測図	44
第10図—2号住居址実測図	21	第33図—マウンド出土遺物実測図	45
第11図—2号住居址出土遺物実測図	21	第34図—土壤墓実測図	45
第12図—3号住居址実測図	23	第35図—1号土壤墓出土遺物実測図	46
第13図—3号住居址カマド実測図	24	第36図—2号土壤墓出土遺物実測図	46
第14図—3号住居址出土遺物実測図	24	第37図—3号土壤墓出土遺物実測図	46
第15図—S X—1実測図	25	第38図—4号土壤墓出土遺物実測図	46
第16図—S X—1出土遺物実測図	25	第39図—1号・2号・3号・4号土壤墓出土古錢拓影	46
第17図—1号土壤実測図	26	第40図—グリッド出土遺物実測図	50
第18図—2号土壤実測図	26	第41図—グリッド出土遺物実測図	51
第19図—3号土壤実測図	26	第42図—グリッド出土遺物実測図	52
第20図—4号土壤墓実測図	27	第43図—グリッド出土遺物実測図	53
第21図—5号土壤墓実測図	27	第44図—グリッド出土遺物実測図	54
第22図—1号・5号土壤出土古錢拓影	28		
第23図—1号溝平面図及びセクション図	30		

第45図—グリッド出土石匙・石鏃実測図	58	第47図—グリッド出土弥生・土師質土器実測図	60
第46図—グリッド出土石器実測図	59	土師質土器実測図	61
		第48図—グリッド出土陶磁器実測図	62

## 表 目 次

第1表 西原遺跡出土石器一覧表 ..... 35

## 図 版 目 次

図版 1	1. 西原遺跡近影	3. 第5号土壤完掘状況
	2. 西原遺跡近影	図版10 第1号住居址出土遺物
	3. 西原遺跡近影	図版11 第1号住居址出土遺物
図版 2	1. 第1号住居址遺物出土状況	図版12 第2・3号住居址, SX-1
	2. 第1号住居址完形土器出土状況	第1・5号土壤、グリッド出土遺物
	3. 第1号住居址炉完掘状況	図版13 グリッド出土遺物
図版 3	1. 第1号住居址完掘状況	図版14 グリッド出土土師、須恵器
	2. 第1号住居址内埋甕	図版15 グリッド出土土師、須恵器、 近世陶磁器、鐵鏃
	3. 第2号住居址遺物出土状況	
図版 4	1. 第2号住居址完掘状況	図版16 1. 当町遺跡近影 2. 第1号住居址完掘状況 3. 土壤墓群検出状況
	2. 第3号住居址プラン確認状況	
	3. 第3号住居址完掘状況	
図版 5	1. 第3号住居址カマド完掘状況	図版17 1. 第1号土壤墓及び石列 2. 土壤墓群完掘状況 3. 第1号土壤墓完掘状況
	2. SX-1完掘状況	
	3. 第1号溝完掘状況	
図版 6	1. 第1号土壤古錢出土状況	図版18 1. 第2号土壤墓完掘状況 2. 第3号土壤墓完掘状況 3. 第4号土壤墓完掘状況
	2. 第1号土壤古錢クローズアップ	
	3. 第2号土壤検出状況	
図版 7	1. 第2号土壤下部状況	図版19 第1・2・3・4号土壤墓出土遺物
	2. 第2号土壤完掘状況	図版20 マウンド・グリッド出土遺物
	3. 第3号土壤完掘状況	図版21 グリッド出土遺物
図版 8	1. 第4号土壤完掘状況	図版22 グリッド出土遺物
	2. 第5号土壤閉塞石出土状況	図版23 グリッド出土遺物
	3. 第5号土壤下部状況	図版24 グリッド出土土器(弥生・土師・擂鉢・ 灰釉・常滑・青磁・天目茶碗・陶器鉢)
図版 9	1. 第5号土壤古錢出土状況	
	2. 第5号土壤古錢クローズアップ	

# 第Ⅰ章 調査状況

## I 調査に至る経緯と経過

昭和62年度における県営圃場整備事業の実施計画により、当教育委員会に町振興課圃場整備係より、該当地内の埋蔵文化財有無について調査依頼を受け、事業予定地内を昭和61年に踏査及び試掘調査を行い、遺跡の存在を確認した。

その調査結果に基づいて、岐北土地改良事務所・県文化課、当教育委員会で協議を行った結果、村山西割工区と村山北割西工区内の西原遺跡と当町遺跡を、圃場整備事業に先立つ記録保存を前提とした発掘調査を行うこととした。

発掘調査は、西原遺跡が通常施工で行われるため昭和62年6月初旬から8月末までの約2ヶ月間、当町遺跡は秋施工で行われるため昭和62年12月下旬から昭和63年1月末までの約1ヶ月間行った。

## II 遺跡の立地と環境

西原遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町村山西割字西原地内(2278、2279、2287、2288)、当町遺跡は、高根町村山北割字当町地内(3236、3237、3241、3252、3253)に所在した。

高根町は、山梨県の北西部、長野県との県境となっている八ヶ岳の南麓に位置する、高原の町である。この南麓は、須玉川と釜無川によって深く侵食されて、川との北高差は約100mを測り、南北20数kmづく舌状台地となり、七里ヶ原とも呼ばれ交通の障害となっている。

## III 周辺の遺跡

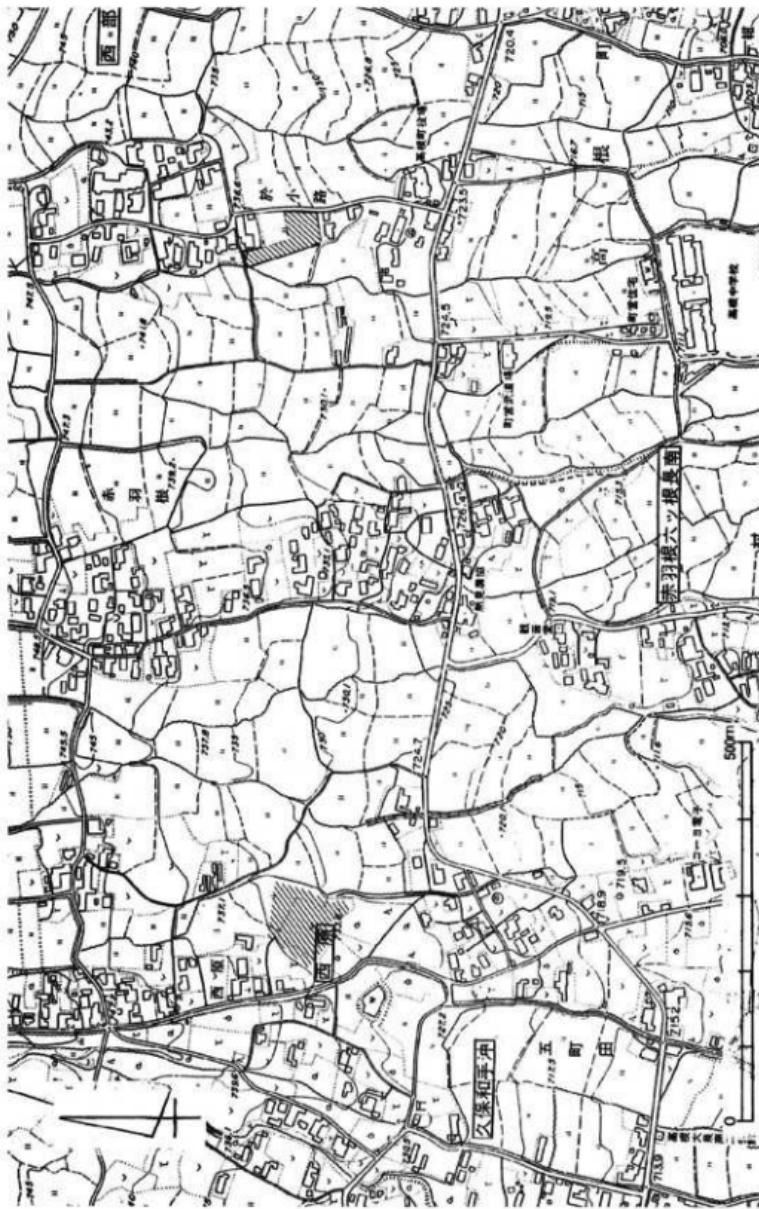
昭和61年度に行った埋蔵文化財の分布調査によれば、高根町役場を中心とした半径2km以内に縄文、古墳前期 平安・中世の遺跡が44ヶ所、散在している。これらの、遺跡は標高700m～800mを測り、小河川によって侵食された丘陵地帯及び微高に立地する。

1. 青木遺跡 昭和56年に調査された縄文時代後期の石棺群と配石造構。
2. 青木北遺跡 昭和57年に調査された平安時代の集落址で、竪穴住居址の壁直下に等間隔をおいて礎石を伴う住居址が検出。
3. 東久保遺跡 昭和58年に調査された平安時代の集落址で、鐵治遺構を伴う住居址を検出。
4. 旭東久保遺跡 昭和59年に調査された中世の掘立柱建物址群。
5. 朝日山城址 「甲斐国志」に記載される烽火台。
6. 社口遺跡 縄文・平安・中世の遺跡。内耳土器が出土。



第1図 遺跡位置図 (1/25000)

第2図 西原・当町遭防周辺地形図



7. 上ノ原遺跡 昭和58年に調査された縄文中期中葉の集落址。
8. 西の原遺跡 昭和60年に調査された縄文時代中期と古墳時代前期の集落址。本町で初めて住居址が確認された。
9. 野添遺跡 昭和58～60年にかけて調査された縄文時代中期の集落址。
10. 石堂A遺跡 昭和60年に調査された、縄文時代中期と平安時代の集落址。
11. 石常B遺跡 昭和60・61年に調査された縄文時代中期後半から晩期にかけての集落と石棺群と配石遺構の複合遺跡。
12. 山の神遺跡 縄文時代中期の集落址。
13. 上の原B遺跡 縄文時代中期の集落址。
14. 旭西久保遺跡 縄文時代中期・平安時代・中世の集落址。
15. 横森遺跡 縄文時代中期。平安時代の集落址。
16. 梅ノ木遺跡 昭和57年に調査された縄文時代中期の集落址。
17. 大正寺遺跡 縄文時代前・中・後期・平安時代・中世の集落址。

以上、掲げたものは発掘調査や現地踏査などによって確認されたものであるが、これらを総合してみると、目をひくものは縄文時代中期・平安時代・中世があげられ、これはこの時代に爆発的に開発するために、入植してきたこと示すものであろう。そして從来、縄文時代後、晚期の遺跡は減少するとされていたが、これまでに発掘調査された結果を見ると、減少するのではなく、低地化つまり沢筋の一段高くなつたテラス状の場所に生活施設が造られてゆく傾向がある。

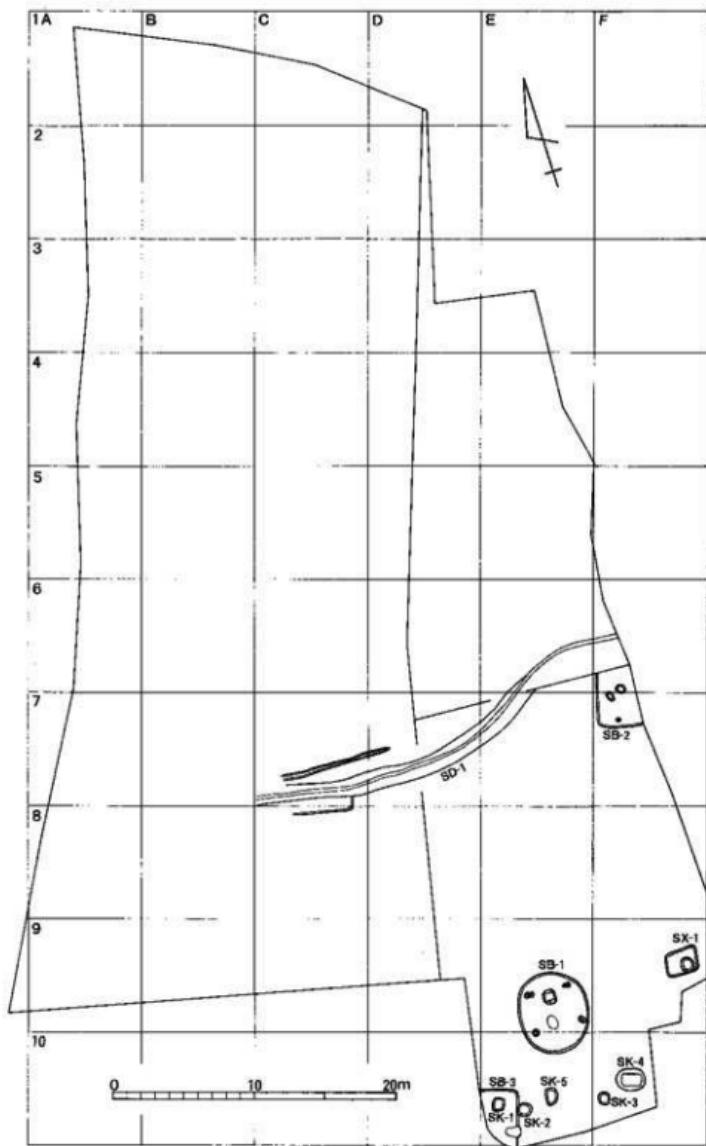
#### IV 調査の方法

岐北土地改良事務所より提示された圃場整備地区内の切り盛り図をもとに、地表面から50cm以上盛り土される所以外を調査対象とした。試掘調査によって、得られた資料をもとにし、重機によって表土（耕作土）及び持ち込み土を除去した。西原・当町遺跡とも、現地剖面に従がって、前者は8m、後者は5mのグリッドを設定した。

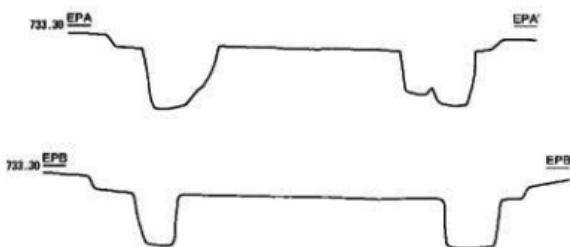
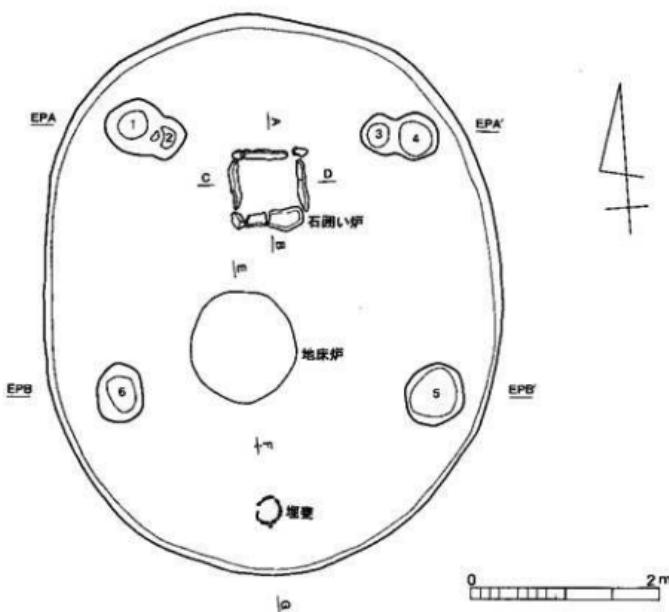
### 第Ⅱ章 西原遺跡

#### I 概要

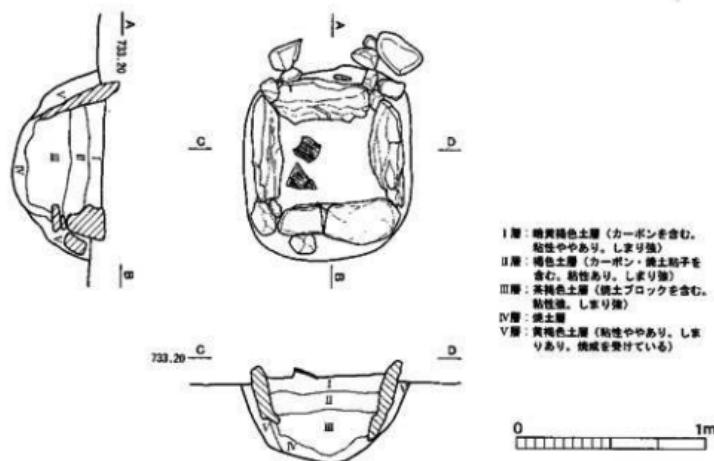
調査によって検出された遺構は、縄文時代の住居址1軒、平安時代の住居址2軒、性格不明遺構1基、土壙5基、（そのうち集石土壙1基）、溝1本の計10基であり、この溝の南側に遺構が集中し、北からは確認できなかったが、遺物は多量に出土している。



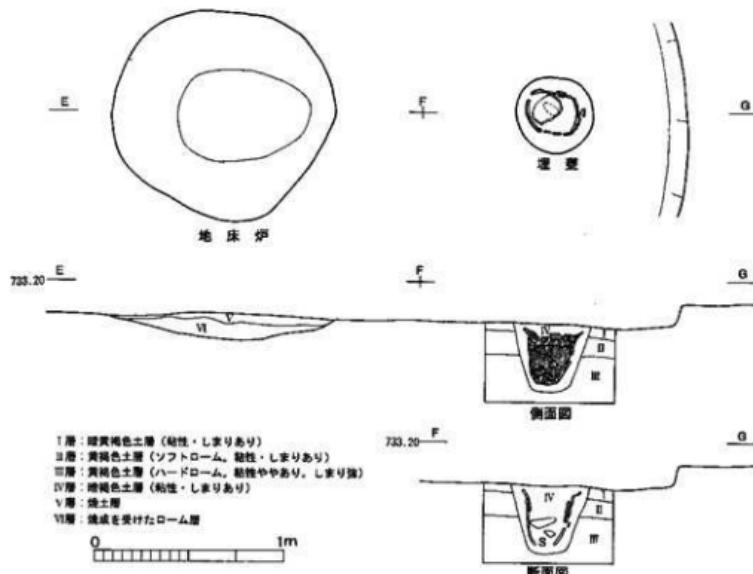
第3図 西原遺跡全體測量図 (1/400)



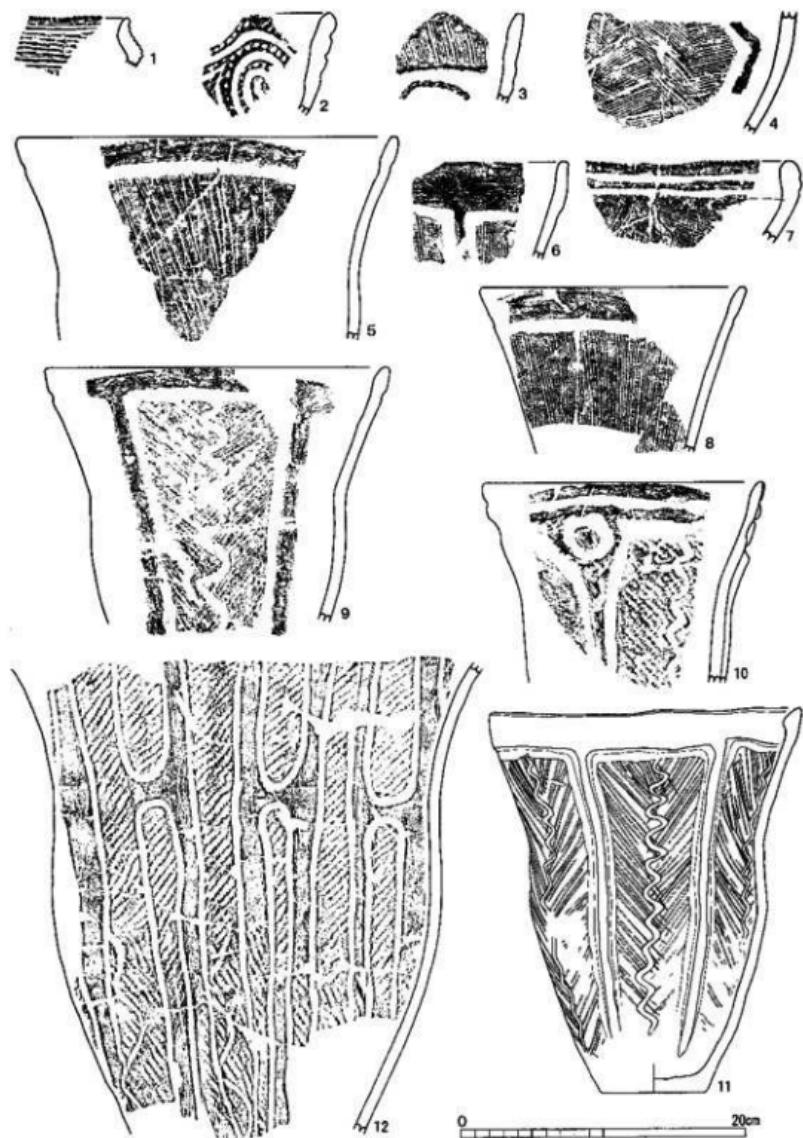
第4図 1号住居址実測図 (1/60)



第一図 1号住居址石囲い炉実測図 (1/30)



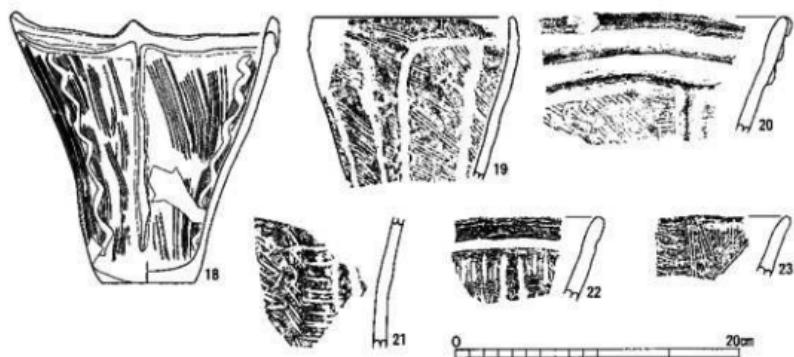
第5図 1号住居址地床炉及び埋壺実測図 (1/30)



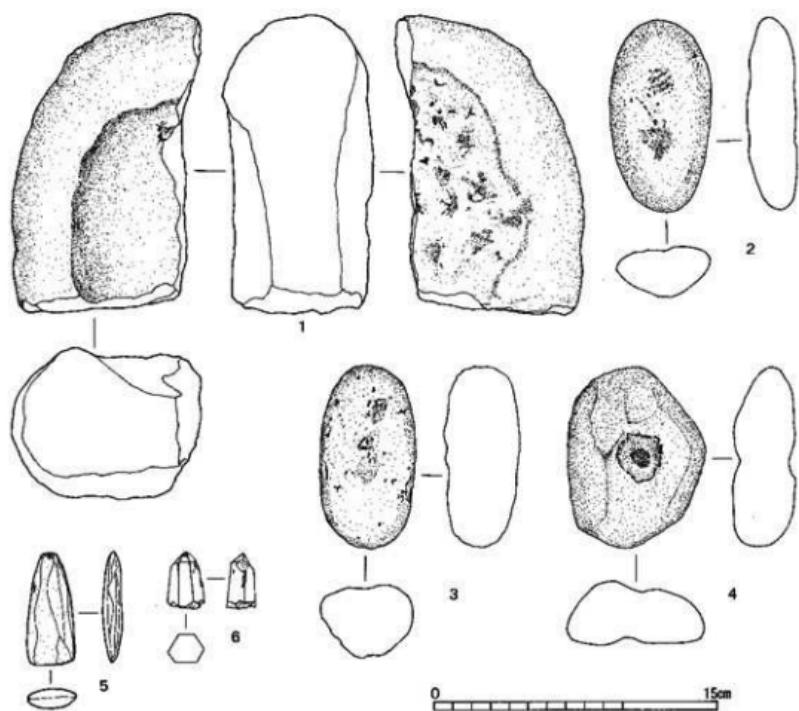
第6図 1号住居址出土土器実測図(1/4)



第7図 1号住居址出土土器実測図 (1/4)



第8図 1号住居址出土土器実測図 (1/4)



第9図 1号住居址出土石器実測図 (1/3)

## II 住居址

### 1 第1号住居址

E…9、10グリッド。造構確認調査中より多量に土器が出土したが、プランは検出されず、さらに掘り下げたところ、炉址及び完形の深鉢が出土したため、確認された住居址である。プランは、柱穴、炉、埋甕の検出状況から、楕円形と推定され、推定で長軸5.7m、短軸5、0mを測る。住居址の主軸は、径の長軸と同一と思われ、ほぼ南北を示す。ピットは、6基確認され、これらのうち、1（床面からの深さ62cm）、2（同42cm）、3（同48cm）、4（同58cm）、5（同50cm）、6（同52cm）であり、5・6に伴うものは1・4であり、2・3は建て変えによるものかもしれない。炉の掘り方は、東西1.8m、南北2.0mの長方形を呈し、深さ90cmを測る。石囲い炉は、南側に上部が偏平な石を用い、残りの西・北・東壁は板状の石を使用してあった。又、4隅に小礎をはめこんでいる。内部は著しく焼土層が形成されていた。住居址のほぼ中心部に、直径1.1mを測る焼きしめられた所があり、地床炉と思われ、石囲い炉を主とすれば副にあたるものであろう。石囲い炉とこの副炉を延長した線上に、直径30cm、深さ30cmの掘り方をした、埋甕がある。埋甕内は、平石と凹石が入っていた。

### 土器

1. 深鉢口縁部。半裁竹管による平行沈線の押引き。胎土・焼成ともに良好である。
2. 深鉢口縁部。波状口縁を呈し、棒状工具による沈線の渦巻を施文し、空間部に刺突文。胎土・焼成ともに良好である。
3. 深鉢口縁部。波状口縁を呈し、波状部に櫛齒状工具による条痕文。胎土・焼成ともに良好。
4. 深鉢胴部。櫛齒状工具による条痕文と蛇行する隆帯。胎土・焼成ともに良好。
5. 深鉢口縁部。口頸部に太く浅い沈線を入れ、棒状工具による沈線。胎土・焼成ともに不良である。石囲い炉内より出土。
6. 深鉢口縁部。口縁部と太い沈線による「匚」字の間が広くあき、縦の区画の中に櫛齒状工具による条痕文と蛇行沈線。内外面ともに磨かれ、胎土・焼成ともに良好である。
7. 深鉢口縁部。太い沈線が二本口縁部に引かれ、櫛齒状工具による条痕文と蛇行沈線。内面は横方に磨かれているが、焼成は不良である。
8. 深鉢口縁部。太い沈線と櫛状工具による条痕文。胎土・焼成ともに良好であり、内面は横方向に磨かれている。
9. 深鉢。櫛齒状工具による条痕文を施文し、指により磨消して沈線となっている。胎土・焼成ともに良好である。
10. 深鉢。箆状工具による沈線を口縁部に入れ、そこから縦の区画をし境目に丸い凹文を挿入

し、区画中に縦文LRを施し、棒状工具による蛇行沈線を入れている。胎土・焼成ともやや良好である。

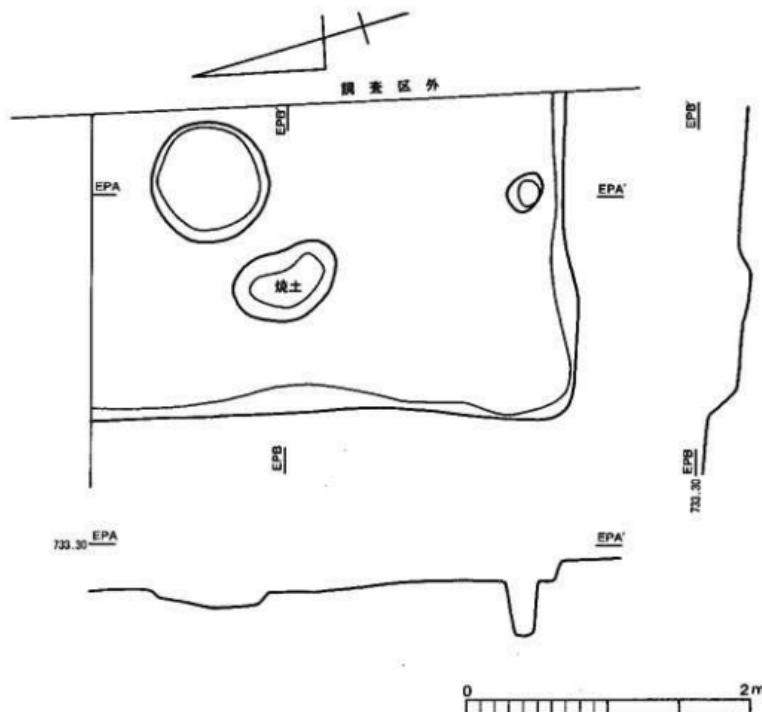
11. 完形床面直上、隆帯と沈線による縦の区画をし、中に半裁竹管による斜め平行沈線に、棒状工具による蛇行沈線。胎土・焼成ともにやや良好であり、胸部下半に二次焼成による剥離が見られ、内面・底部ともに磨かれている。
12. 深鉢胸部。沈線による縦位の区画をし、その中に「U」及び逆「U」一对を入れ、ほぼ一つおきに縦文LRを施し、胸部下半に蛇行沈線。胎土・焼成ともに良好。
13. 深鉢。口縁部に沈線による横位の区画をし、空間部に渦巻文と棒状工具による沈線。胸部は、2個一对の沈線による渦巻文を施し、その空間部に沈線が入っている。胎土・焼成ともに良好であり、内外面特に口縁はよく磨かれている。
14. 深鉢胸部。2個一对の沈線による渦巻文を施し、その空間部に単独の渦巻と、半裁竹管による平行沈線を施す。胎土・焼成ともに良好である。埋甕として出土。
15. 深鉢胸部。隆帯による横位の区画の中に、半裁竹管による平行沈線を充填。胎土・焼成とも良好であり、内外面とも横方向に磨かれている。
16. 深鉢腹部。隆帯による横位の区画の中に、半裁竹管による平行沈線と棒状工具による渦巻文を交互に施す。胎土・焼成とも良好であり、内面は横方向に磨かれている。
17. 小型の深鉢。口縁部に沈線を入れ、隆帯による連弧文とそれから縦に延びる隆帯により縦の区画をし、その間を櫛齒状工具による条痕文を施す。胎土・焼成ともに良好である。
18. 小型の深鉢。4単位の波状口縁を呈し、隆帯による縦の区画を施す。櫛齒状工具による条痕文と、中間部に蛇行沈線が入っている。胎土・焼成ともに良好であり、内面は横方向に磨かれている。
19. 小型の深鉢。太い沈線による縦の区画をし、その間を櫛齒状工具による条痕文を施す。胎土・焼成とも良好。内面は横方向に磨かれ、炭化物が付着していた。石囲い炉内出土。
20. 深鉢口縁部。2本の太い沈線が口縁部を回り、そこから隆帯が縦の区画をし、棒状工具による横と斜めに蛇行する沈線が入る。
21. 深鉢胸部。隆帯による縦の区画が入り、空間部を胞状工具による斜めと横の沈線と薄い蛇行沈線が施す。胎土は良好であるが、風化している。
22. 深鉢口縁部。太い沈線が口縁部を回り、棒状工具による沈線を施す。胎土・焼成ともに良好であり、内面は横方向に磨かれている。
23. 深鉢口縁部。半裁竹管による、縦・横・斜めの平行沈線を施す。胎土・焼成とも良好。

## 石 器

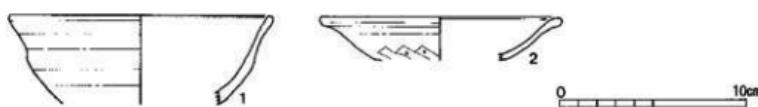
1. 安山岩製の石皿と蜂の巣石（両面使用） 2・3. 閃緑岩製の磨石で、2は埋甕内から出土。 4. 安山岩製の凹石。 5. 塩基性岩類の小型定形磨製石斧。 6. 水晶の原石。

## 2 第2号住居址

F-6・7グリッド。遺構確認調査において、南西の1/4が検出された住居址である。東側半分は、水田造成時による土取等で、北側半分は畠等の区画等で削り取られていた。遺構の遺存状態は比較的良好であり、平面プランは隅丸方形を呈すると思われ、残存状態の大きさは、東西2.3m×南北3.5m。壁高は深い所で20cmを測る。床面には礫が散乱していた。床面はローム面を平坦に整形し、中心部は比較的硬くしまっていたが、特に西壁際は軟弱であった。



第10図 2号住居址実測図 (1/40)



第11図 2号住居址出土土器実測図 (1/3)

硬くしまっていた所に、赤茶けた部分があり、燃焼させた所であろう。ピットは2本検出されたが、住居址に伴うのは南壁直下の1本だけであろう。

## 土 器

遺物の出土量は比較的少なく、ほとんどが覆土中からであった。1は、口径14.2cm、残高4.7cmの土師器壺であり、口唇部は丸形であり、器体部外側は剥離している。2は、口径13cm、残高2.3cmの土師器皿であり、器体部下半に鉗削りされている。出土遺物はいわゆる甲斐型の土師器であり、暗文ではなく、口縁部は丸形から玉縁化しているので、10世紀後半（950～975年頃）に比定されよう。その他の遺物としては、極少量ではあるが、鉄砲と羽口の破片が出土している。しかし、ここは旧地目が畠地で桑園となっていたため、かなり深いところまで耕作されていたと思われる。

### 3. 第3号住居址

E-10グリッド。調査区域の関係で北東隅しか調査できなかった。遺構の遺存状態は比較的良好であったが、SK-1及びSK-2と重複していた。SK-1は住居址の直上にあり、SK-2は東壁と接して存在する。平面プランは隅丸方形を呈すると思われ、残欠状態の大きさは、東西2.2m×南北4m×壁高25cmを測り、主軸方向はE-30-Sを示す。床面はローム面を平坦に整形し、比較的硬くしまっていた。

カマドは東壁の中心よりやや南よりに構築され、天井部は破壊されていたが、袖石・支脚石は遺存していた。

## 土 器

出土遺物は、第2号住居址と同様に少ないが、地目が山林であったため擾乱は受けていない。1は、土師器壺であり、口径11.8cm、高さ4.4cm、底径8.2cmを測り、器体部はロクロ整形後外面は鉗削り、内面は花弁状暗文、底部は回転糸切り後周辺鉗削りを行っている。胎土、焼成ともに良好である。

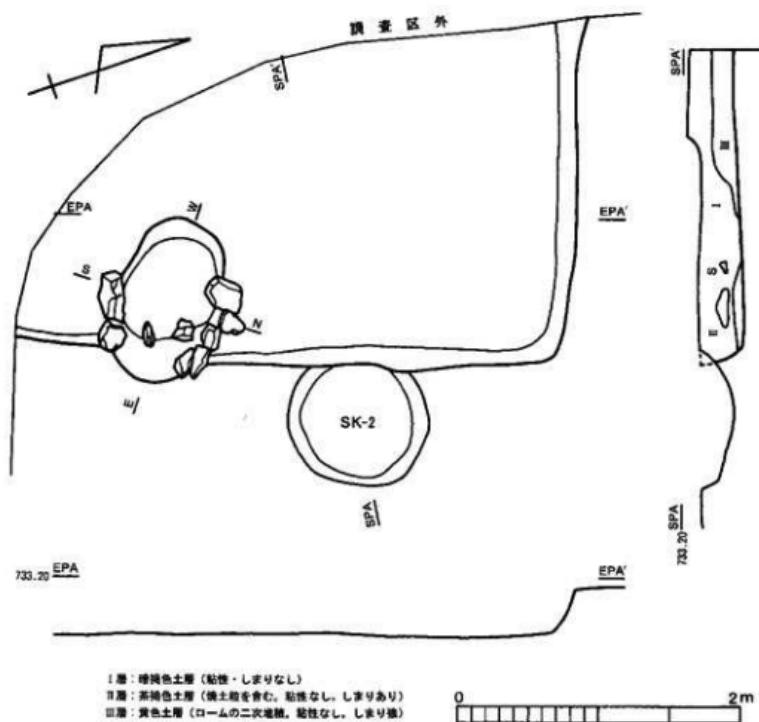
2は、須恵器壺であり、底径5.8cm、残高2.5cmを測り、底部は回転糸切り、器体部内外面ともロクロ整形である。胎土、焼成とともにやや良好である。

3は、須恵器壺であり口径11.1cm、残高4.1cmを測り、器体部内外面ともロクロ整形である。胎土、焼成とともに良好である。

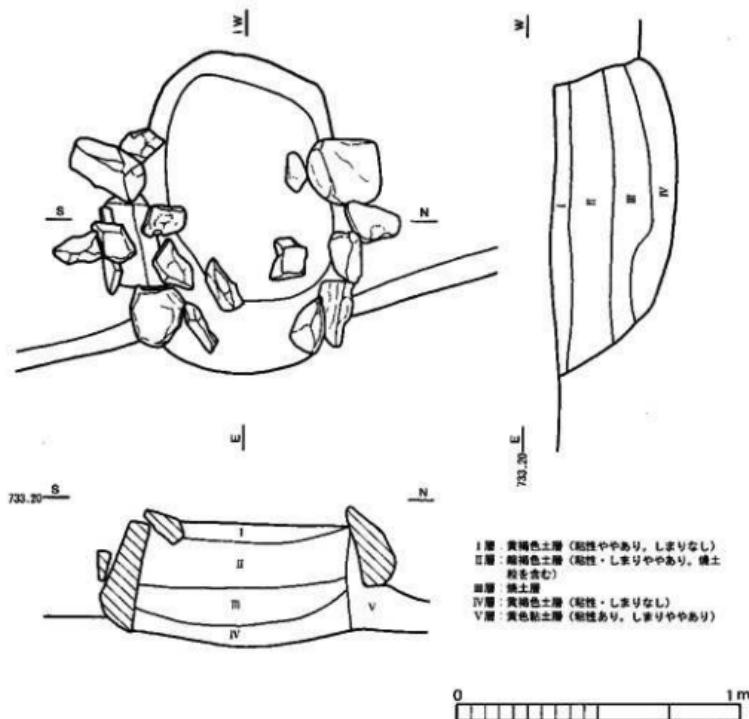
4は、土師器壺でカマドより出土している。口径26.2cm、残高10.5cmで口縁部内外面は水引

き整形、胴部外面には刷毛目模がみられる。1と4は、いわゆる甲型の土師器であり、VII期（9世紀第3四半期頃）と思われる。

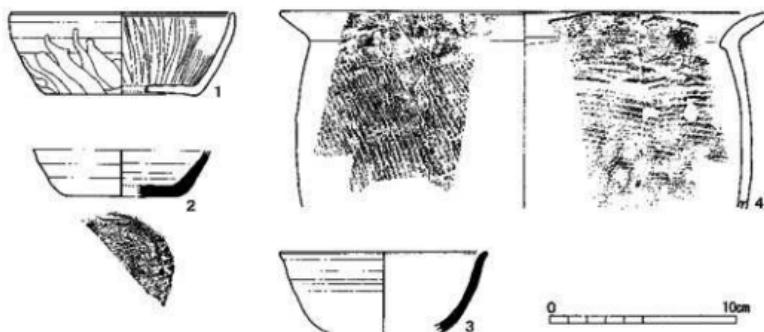
高根町内で現在までに発掘調査された平安時代の遺跡は8遺跡あり、住居址の総軒数は70軒を数え、時期は土器編年によれば9世紀前半から11世紀後半までである。この中でも数多く見受けられるのが、9世紀後半から10世紀後半である。当遺跡より検出されている遺構も、この時期に含まれており、のことから9世紀後半代において急激に開発されていったことを示すものであろう。



第12図 3号住居址実測図 (1/40)



第13図 3号住居址カマド実測図 (1/20)



第14図 3号住居址出土土器実測図 (1/3)

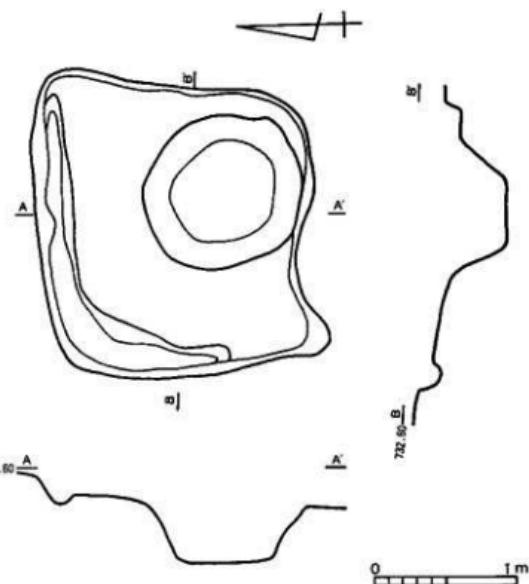
### III 性格不明遺構

#### 1. SX-1

F-9グリッド。東西2m×南北2mのほぼ隅丸方形を呈し、東南壁直下に直径1.2m×深さ58cmの土壙が重複し、北壁から西壁半分にかけて周溝がまわる。

#### 土 器

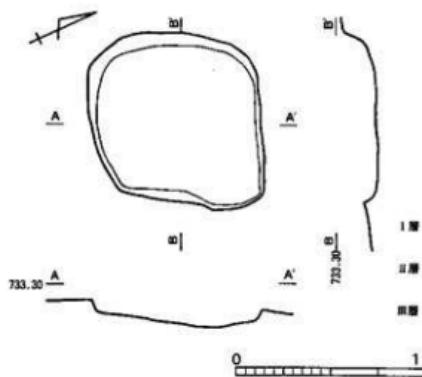
出土遺物はほとんどなく、実測可能なものはこの1点のみである。1、土器の壺であり、胴部内外面とも刷毛目があり、焼成、胎土とも良好である。遺物として10世紀前半と思われるが、遺構に伴うものかは不明である。



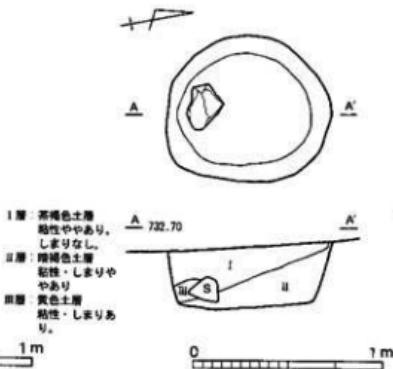
第15図 SX-1 実測図 (1/40)



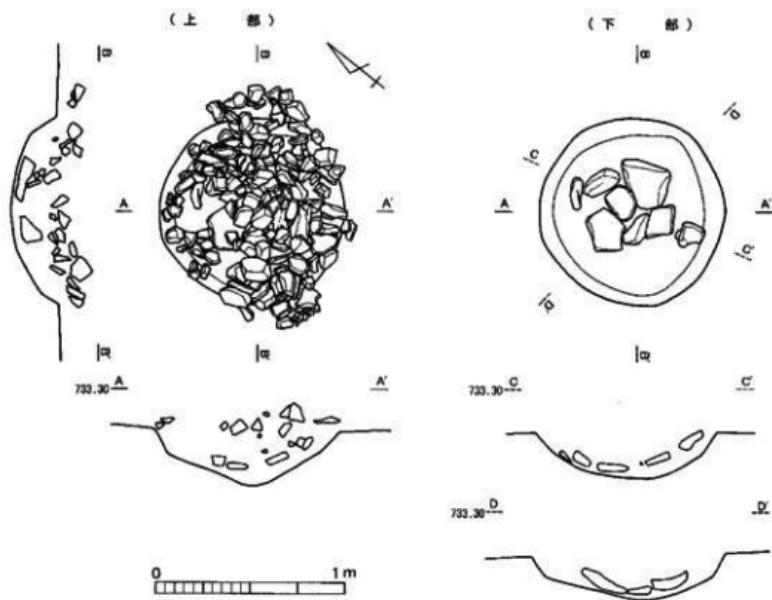
第16図 SX-1 出土土器実測図 (1/3)



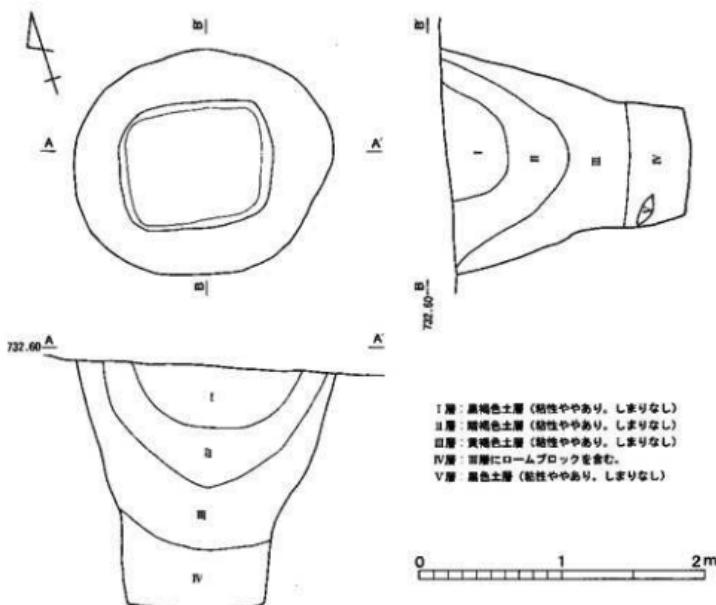
第17図 1号土壤実測図 (1/30)



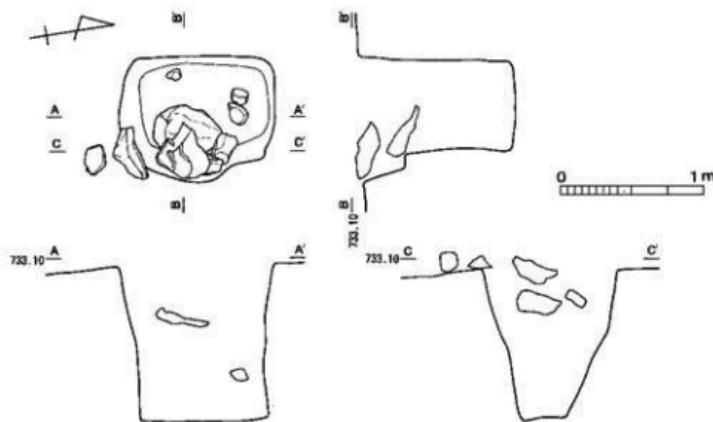
第19図 3号土壤実測図 (1/30)



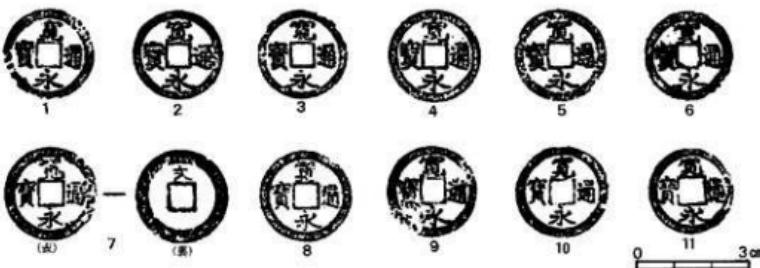
第18図 2号土壤実測図 (1/30)



第20図 4号土壤実測図 (1 / 40)



第21図 5号土壤実測図 (1 / 40)



第22図 1号土壙(1~6)、5号土壙(7~11)出土古錢拓影(2/3)

## IV 土 壙

### 1. 第1号土壙

E-10グリッド。第3号住居址に重複し、東西0.9m×南北0.9m×深さ10cmのほぼ正方形を呈し、壁際と覆土中より炭化物、底部からは占銭が6枚出土し、「寛永通寶」であった。これらのことより、本址は近世の墓址と思われる。

### 2. 第2号土壙

E-10グリッド。第3号住居址と境を接し、直径1mのほぼ円形である。本址は、上部構造に拳大の小礫を使い、下部になるに従がい大きくなり、底部には人頭大の板石が敷かれていた。遺物の出土はない。

### 3. 第3号土壙

F-10。80cm四方の隅丸方形を呈し、深さ30cmを測る。土壙内部からは、人頭大の礫が出土している。

### 4. 第4号土壙

F-10グリッド。据り込み面では、東西1.84m×南北1.6m×深さ1.8mの東西に長い楕円形を呈し、下部では東西1.1m×南北0.9mの隅丸長形となる。

## 5. 第5号土壙

F-10グリッド。掘り込み面で東西0.9m×南北1.11m×深さ1.02mを測る隅丸の長方形を呈し、底部まではほぼ垂直に落下している。遺構確認面から35cm下がった所に、40cm四方の板石が2枚ほどあり、閉塞していた。底部付近から、人間の歯及び古銭が5枚出土し、「寛永通寶」であった。これらのことより、本址は近世の墓址と思われる。

## V 溝

### 1. 第1号溝

C-7、D-7、E-7、E-6、F-6グリッドに位置し、全長28m、幅0.3m～1.7m、深さ13～60cmを測り、弧を描きながら西から東へ走っている。この溝の北側に、全長8m、幅30～70cm、深さ3～12cmを測り、西から東へ直線的の溝が並行して走っている。これらの溝は、西にあったと思われる貯水池の用水路と思われる。この貯水池はA-1～D-9と調査区域外までに広がると思われ、この区域の土層は全面的に粘性を持つ黒褐色土層が広がり、下層に行くに従がって砂礫層、ローム層となり、調査中においても湧水が見られた。

## VI グリッド出土遺物

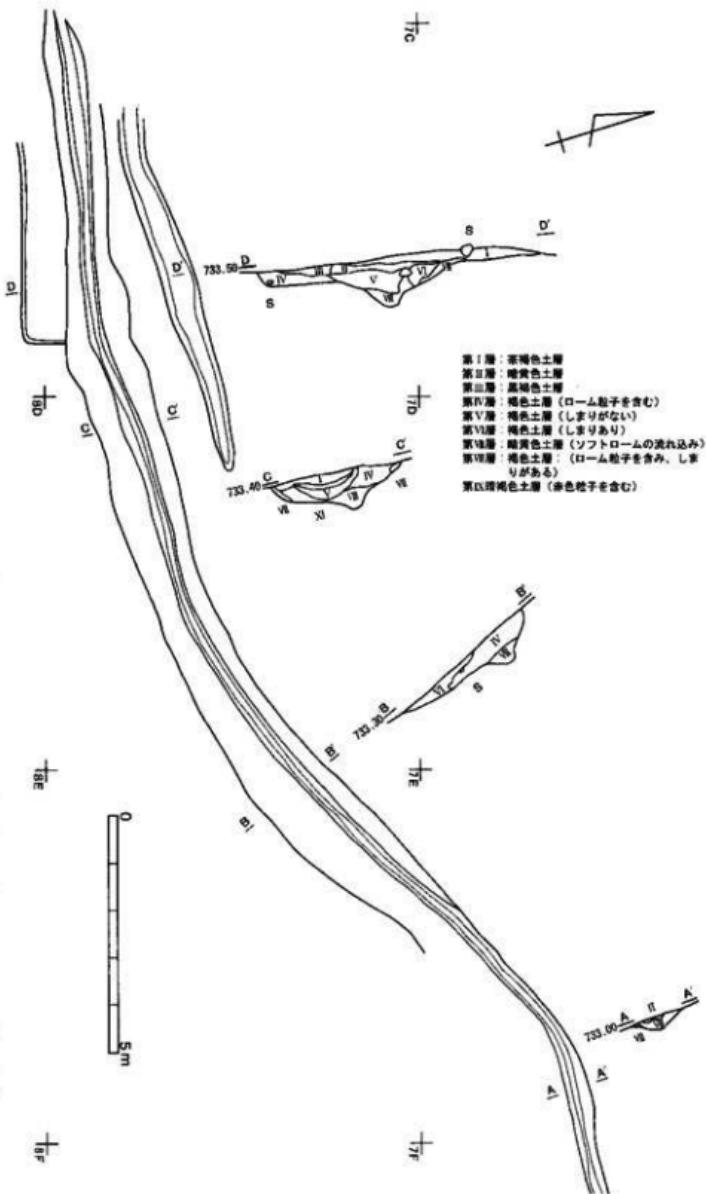
本遺跡において、遺構の確認調査中、貯水池と思われる黒褐色土層中より多量の土器、石器が出土している。しかし、これらの遺物は、遺構に伴うものではなく、流れ込みによる混入と思われる。

### 1. 縄文時代の遺物

#### 第1類土器 (1・2)

1. B7、半裁竹管による平行沈線の横位の区画をし、中に平行沈線を斜めに充填。胎土、焼成ともに良好である。 2. B3、半裁竹管による同心円状の平行沈線と蛇行隆帯。胎土、焼成ともに良好である。 以上は縄文時代中期前葉の所産であろう。

#### 第1類土器 (3・4)



第23図 1号溝平面図(アーバンリバーベンチ面図) / 平面図1 / 020・カクシエン図1 / 09

3. C 4、波状口縁を呈し、口縁部に太い沈線の渦巻を施文。胎土、焼成ともに不良であり、風化している。 4. A 8、波状口縁を呈し、太い沈線による縦の区画の中に縄文 L R を施文。胎土、焼成ともに良好である。以上は縄文時代中期後葉の所産であろう。

### 第3類土器 (5・6)

5. 第3号住居址覆土。棒状工具による沈線。内面に横方向の成形痕あり、胎土、焼成ともに良好である。 6. B 3、棒状工具による沈線の区画の中に縄文 R L を充填。胎土、焼成ともにやや良好である。以上は縄文時代後期前葉の所産であろう。

### 第4類土器 (7)

7. C 3、波状口縁を呈し、中心部に貫通する穴と両側に2個を焼成前に入れている。内面は横方向に磨かれている。胎土、焼成ともやや良好である。これは縄文時代後期前葉の所産であろう。

### 第5類土器 (8・9)

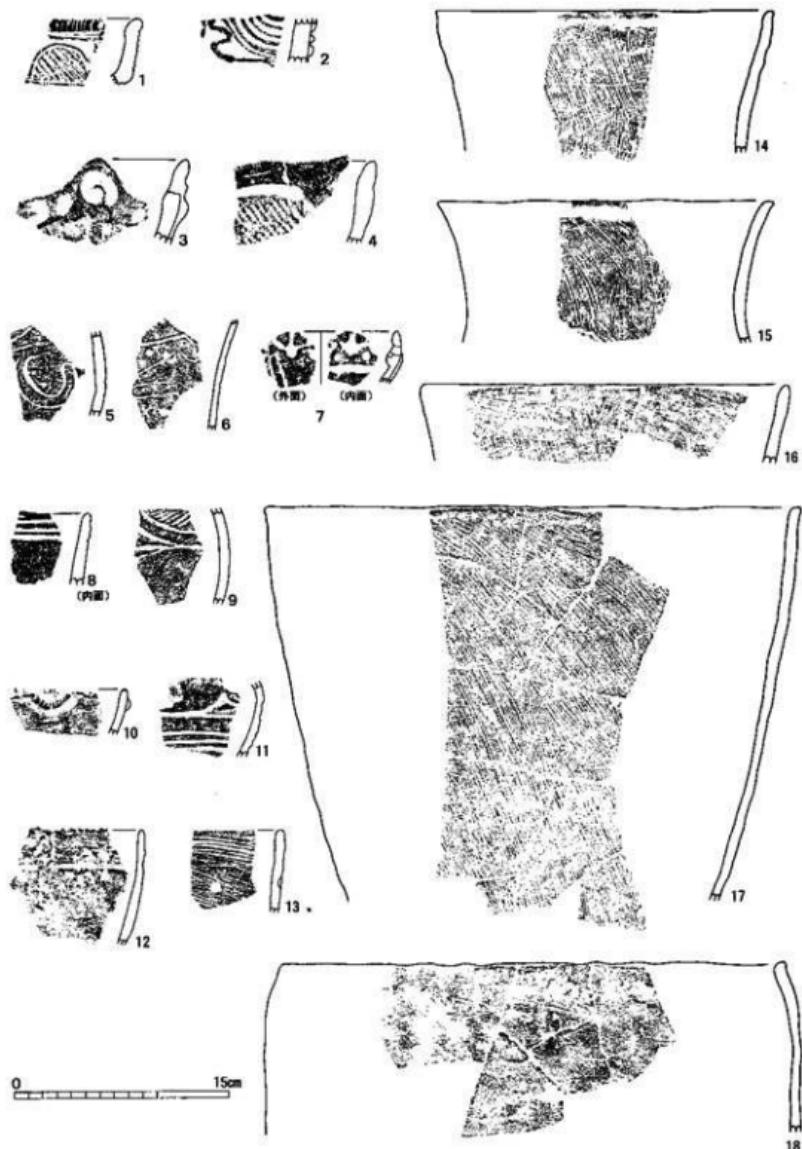
8. C 5、口縁部に籠状工具による沈線。内外面とも横方向に磨かれている。胎土、焼成ともに良好であり、硬く焼きしまっている。 9. C 2、棒状工具による沈線の区画中に縄文 L R を充填。胎土は良好であるが著しく風化している。以上は、縄文時代後期中葉の所産であろう。

### 第6類土器 (10・11)

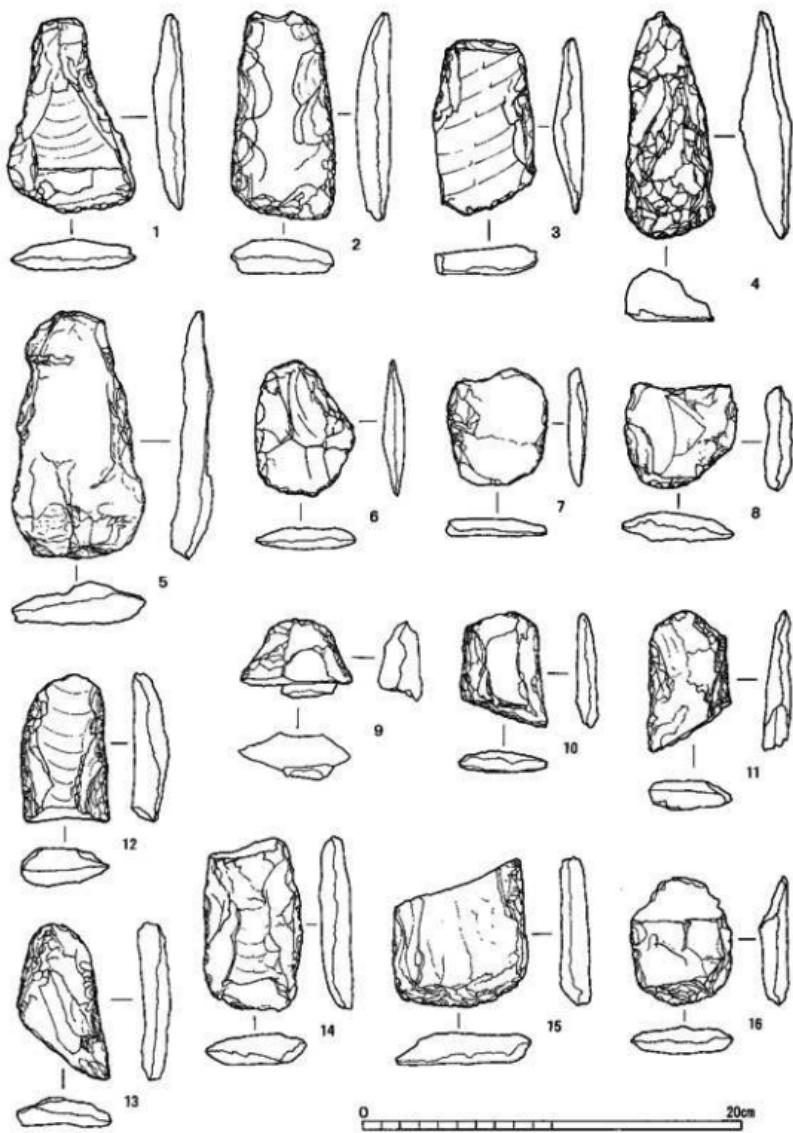
10. B 6、口縁部と口縁部につく「U」状の隆帯に籠状工具による沈線。胎土、焼成ともに良好である。 11. C 2、内外面とも横方向に磨かれ、外面に棒状工具による沈線。胎土、焼成ともに良好である。以上は縄文時代後期後葉の所産であろう。

### 第7類土器 (12~17)

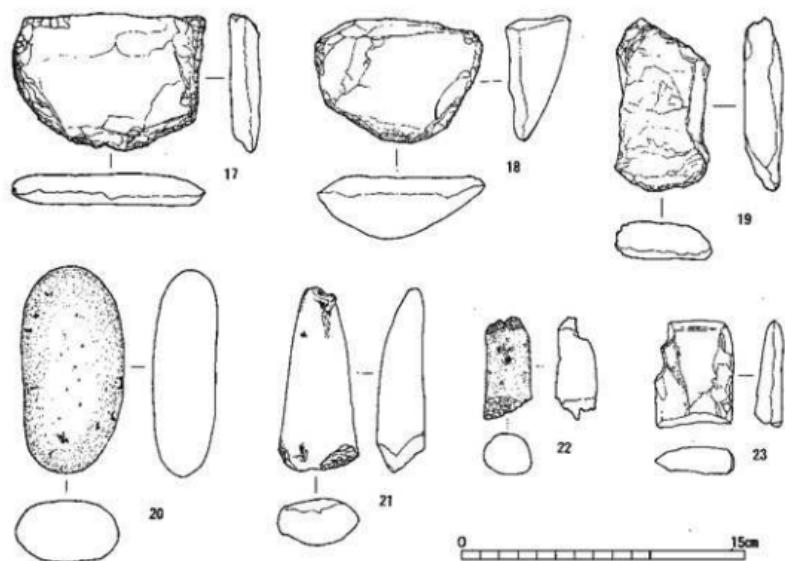
12. E 3、口縁部に棒状工具による施文があり、一見波状口縁を呈する。器体部に籠状工具による刺突文。全体的に風化している。 13. C 4、深鉢。5本…単位の棒状工具による条痕文。胎土、焼成ともに良好である。内面は横方向に磨かれている。 14. B 2、深鉢。5本…単位



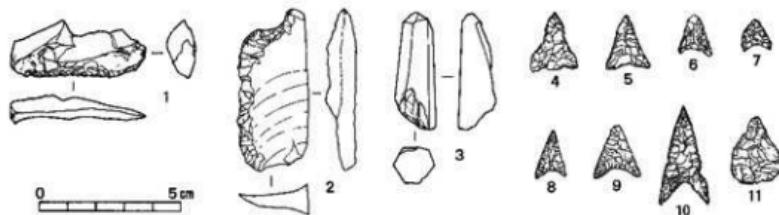
第24図 グリッド出土縄文土器実測図 (1/4)



第25図 グリッド出土石器実測図 (1 / 3)



第26図 グリッド出土石器実測図（1／3）



第27図 グリッド出土石匙・水晶・石鉄実測図（1／2）

の棒状工具による条痕文。胎土、焼成ともに良好である。内面は横方向に磨かれている。

15. E 3、深鉢。櫛状工具による条痕文。胎土、焼成ともに良好であるが、施文が雜であり、内面も粗い整形である。 16. C 3、深鉢。5木一単位の櫛状工具による条痕文。胎土、焼成ともに良好である。内面は横方向に磨かれている。 17. B 2、ほぼ直立する粗製土器であろう。棒状工具による沈線が若干みられる。胎土、焼成ともやや良好である。

### 1. 打製石斧

No	グリッド	長軸	短軸	厚さ	石 材	形 態	備 考
1	B 4	10, 4	6, 8	1, 1	ホムンフェルス	板型	
2	C 4	11, 1	5, 5	1, 3	"	"	
3	C 2	9, 4	5, 4	1, 6	粘 板 岩	"	
4	C 2	12, 2	4, 7	2, 8	ホルンフェルス	"	
5	B 2	13, 3	7, 2	2, 2	粘 板 岩	"	破損
6	B 3	7, 3	5, 4	1, 2	ホルンフェルス	"	"
7	E 10	6, 3	5, 4	1, 0	粘 板 岩	"	"
8	A 8	7, 0	5, 6	1, 6	ホルンフェルス	不明	"
9	B 3	4, 2	6, 0	2, 5	"	"	"
10	C 5	6, 1	4, 7	1, 2	粘 板 岩	"	"
11	C 4	7, 5	5, 0	1, 6	ホルンフェルス	"	"
12	C 5	8, 0	4, 8	2, 0	"	"	"
13	C 5	7, 5	5, 1	1, 6	砂 岩	"	硬質
14	A 5	9, 3	5, 4	1, 7	ホルンフェルス	"	破損
15	B 3	7, 9	7, 2	1, 8	"	"	"
16	B 2	7, 0	5, 4	1, 5	"	"	"
17	B 2	7, 4	10, 3	1, 7	"	"	"
18	D 3	6, 8	7, 9	3, 5	粘 板 岩	"	"
19	B 6	9, 3	5, 2	2, 1	"	"	"

### 2. 磨 石

No	グリッド	長軸	短軸	厚さ	石 材	形 態	備 考
20	C 5	11, 1	5, 5	3, 3	安 山 岩		

### 3. 磨製石斧

No	グリッド	長軸	短軸	厚さ	石 材	形 態	備 考
21	C 5	9, 9	4, 3	2, 6	緑色 藻灰岩	浮棒状	破損
22	B 2	5, 5	2, 6	2, 3	ホルンフェルス	"	石棒?
23	C 4	5, 8	4, 3	1, 5	緑色 藻灰岩	定 形	一部磨製

### 4. 石 匙

No	グリッド	長軸	短軸	厚さ	石 材	形 態	備 考
24	C 1	4, 2	2, 0	1, 0	チ ャ ー ト	横 長	破損
25	C 2	5, 2	2, 5	1, 1	黒 曜 石	縱 長	"

### 5. その他

No	グリッド	長軸	短軸	厚さ	石 材	形 態	備 考
26	B 6				水 晶	六角柱	自然石

### 6. 石 錐

No	グリッド	長軸	短軸	厚さ	石 材	形 態	備 考
27	B 6	2, 0	1, 7	0, 5	黑 曜 石	有 茎	
28	D 4	1, 9	1, 6	0, 4	黑 曜 石	無 茎	
29	D 3	1, 4	1, 2	0, 4	黑 曜 石	"	
30	E 5	1, 1	1, 0	0, 4	黑 曜 石	"	
31	C 6	1, 7	1, 1	0, 3	黑 曜 石	"	
32	B 3	1, 6	1, 8	0, 3	黑 曜 石	"	
33	表 採	3, 5	1, 7	0, 3	黑 曜 石	"	
34	B 6	2, 4	2, 3	0, 9	黑 曜 石	石 錐	

## 2. 平安時代の遺物

縄文土器と同一層中より出土しており、流れ込みによるものと思われる。

### 第1期 (1)

1. D-4、須恵器坏で底径 8.8 cm、残欠高 1.7 cmを測り、底部の整形は回転糸切り後高台を貼付け、ていねいに横ナデしている。内面は横方向に磨かれており、胎土、焼成ともに良好である。これらのことより第IV期（8世紀第4四半期）に比定されよう。

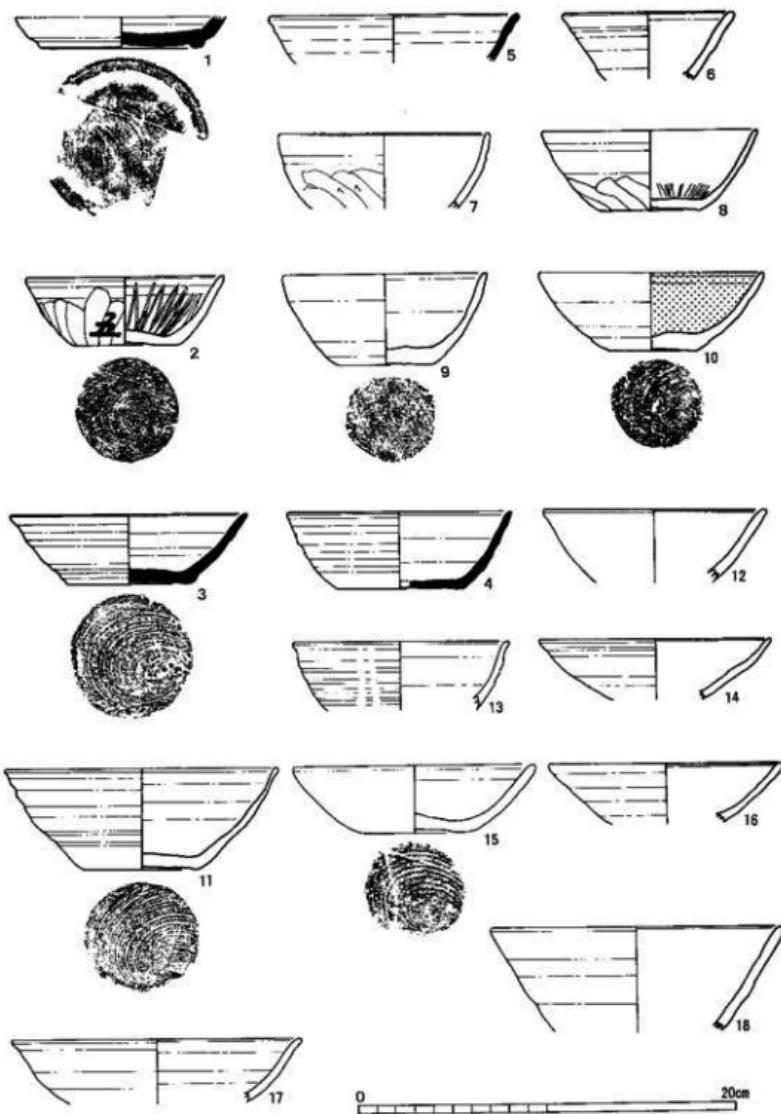
### 第2期 (2~4)

2. B-6、完形で出土した土師器の坏であり口径 10.6 cm、器高 3.7 cm、底径 5.6 cmを測り、口縁部まで直線的に開き、口縁部は丸形である。器体部外面は笠削り、内面は花弁状暗文が施こされている。底部は回転糸切り後、笠削りされている。器体部に「五」の墨書があり、胎土、焼成とも良好であるが、風化している。 3. E-5、須恵器の坏であり口径 12.4 cm、器高 3.7 cm、底径 6.4 cmを測り、口縁部は丸形を呈する。底部は回転糸切りのみである。胎土、焼成とともに良好である。 4. D-5、須恵器の坏であり口径 12.4 cm、器高 4.1 cm、底径 6.8 cmを測り、口縁部は丸形を呈し、底部は回転糸切りのみである。胎土、焼成ともに良好である。以上3点は、底径／口径比が50~60%付近であり、第VII期（9世紀第3四半期）に比定されよう。

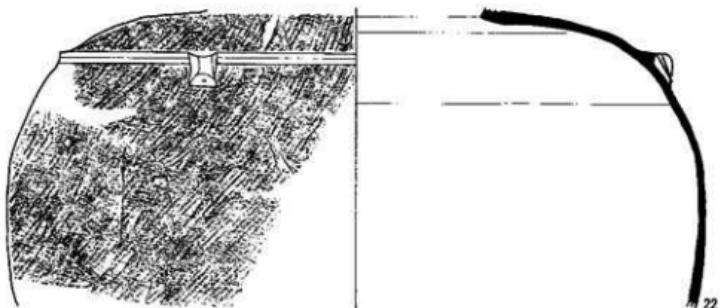
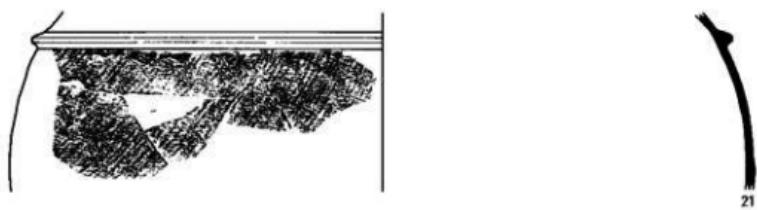
### 第3期 (5~11)

5. A-7、須恵器の坏であり口径 13.4 cm、残欠器 2.6 cmを測る。口縁部は丸形を呈し、胎土、焼成ともに良好である。 6. C-5、土師器の坏であり口径 9 cm、残欠高 3.5 cmを測り、口縁部まで直線的に開き、丸形を呈する。胎土、焼成ともに良好である。 7. A-7、土師器の坏であり口径 11.2 cm、残欠高 4 cmを測り、口縁部は丸形を呈する。器体部外面に笠削りが施こされている。胎土、焼成とも良好である。 8. B-7、土師器の坏であり口径 11.4 cm、器高 4.3 cm、底径 5.2 cmを測り、口縁部は丸形を呈する。器体部外面は斜めの笠削り、内面は暗文が施こされている。底部は回転糸切り後笠削りされている。胎土、焼成ともに良好である。

9. C-5、土師器の坏であり口径 10.8 cm、器高 4.9 cm、底径 4.8 cmを測り、口縁部は丸形を呈し、底部は回転糸切り後笠削りされている。器体部内面に暗文が施こされているが、著しく風化している。 10. D-4、土師器の坏であり、内面黒色処理（いわゆる内黒土器）されている。口径 12 cm、器高 4.2 cm、底径 4.6 cmを測り、口縁部は丸形を呈する、全体的に風化している。 11. E-4、ほぼ完形で出土した土師器の坏であり、口径 14.6 cm、器高 5.4 cm、底径 6.0 cmを測り、口縁部は丸形を呈し、器体部は内外面ともロクロ整形であり、底部は回転糸



第28図 グリッド出土土器・須恵器実測図 (1 / 3)



0 20cm

第29図 グリッド出土 須恵器・鐵器実測図 (1/3)

切りのみである。胎土、焼成とともに良好である。

以上の7点は、底径／口径比が44～50%付近であり、第VII期（9世紀第4四半期）に比定されよう。



第30図 グリッド出土近世遺物実測図 (1/3)

#### 第4期 (12~18)

12. D-5、土師器の坏であり口径 12.0 cm、残欠高 3.9 cmを測り、口縁部は丸形である。器体部内面は磨かれており、胎土、焼成とともに良好である。 13. A-7、土師器の坏であり口径 11.6 cm、残欠高 3.8 cmを測り、口縁部は丸形である。胎土、焼成とともに良好である。  
14. C-5、土師器の坏であり口径 12.4 cm、残欠高 3.3 cmを測り、口縁部は丸形である。胎土、焼成とともに良好である。 15. A-7、土師器の坏であり口径 12.8 cm、器高 3.6 cm、底径 5.8 cmを測り、口縁部は丸形である。底部は回転糸切りのみであり、胎土、焼成とも良好である。  
16. B-6、土師器の坏であり口径 12.6 cm、残欠高 3.2 cmを測り、口縁部は丸形を呈し、胎土、焼成とともに良好である。 17. C-5、土師器の坏であり口径 15.4 cm、残欠高 3.4 cmを測り、口縁部は、丸形であり、胎土、焼成とともに良好である。 18. C-5、土師器の坏であり口径 15.4 cm、残欠高 5.5 cmを測り、口縁部は丸形であり、胎土、焼成とともに良好である。

以上8点は完形品から推定すると、底径／口径比は36～44%付近であり、第IV期（10世紀第1四半期）に比定されよう。

#### 3. 須恵器壺

19. C-4、長頸壺の口頸部であり、口径20cm、残欠高11cmを測る。整形は内外面ともロクロ整形である。胎土、焼成とも良好である。 20. C-5、長頸壺の口頸部と肩部であり、口径 26.6 cm、残欠高 11.2 cmを測る。口縁部の整形は内外面ともロクロ整形であり、器体部は叩縮めである。胎土、焼成とも良好である。 21. C-5、長頸壺の肩部である。整形は内外面とも叩縮めである。胎土、焼成とも良好である。 22. E-6、四耳壺の肩部である。整形は内外面とも叩縮めで、胎土、焼成とも良好である。

以上4点は、10世紀前半頃の所産であろう。

#### 4. 鉄 器

23. B-2、長軸 5.9 cm、短軸 2.9 cmの鉄鏡である。茎は 1.2 cm残っており、左側の返しが

長くなる形態である。

### 5. 近世陶器

1. F-9、口径10cm、残欠高5.6cmを測る。器形は2本一対となる角があり、穴があいており、吊すようになっている。全面的に釉薬がかかっており、茶褐色である。器体部内面に炭化物が付着している。

2. E-10、残欠高5cmを測り、ロクロ整形である。器体外部は緑黄色、内面は釉薬のたれがあるので施釉されておらず、赤褐色である。

3. D-8、口径5.8cm、残欠高3.7cmを測る小型碗である。器体部は内外面とも黄灰色の釉薬がかかっており、胎土、焼成とも良好である。

4. F-7、底径4cm、残欠高2.6cmを測る高台である。器体部外面は灰白色の釉薬が施釉されているが、内面には施こされていない。胎土、焼成ともに良好である。

## VII 小 括

西原遺跡の調査によって、縄文時代から平安、近世の遺構群を明らかにすることができた。検出された縄文時代の遺構は、住居址1軒のみであるが、出土した土器が比較的良好な一括資料であり、住居の構成人員、上屋構造を考える上での参考資料になるであろう。

平安時代の遺構は2軒確認されているが、1軒はカマドが伴わないので、床面などの状況で住居址とした。この遺構内からは鉄サイと羽口が出土しているため、小鍛冶をしていたと思われる。これと同様の遺構は、大泉村の東原遺跡、高根町の東久保遺跡などから検出されており、数多く検出される住居址中から1軒か2軒であることが共通である。このことは、農作業などに使用され、破損した道具を修理又は原材料を加工するための工房址であると思われる。

近世の土塙墓が2基検出されており、覆土中より古銭、炭化物が出土している。古銭は「寛永通寶」のみであり、字体により区分すると3種ある。1. は比較的字体が細いもの、2. は字体が太く明瞭であるもの、3. 字体が太くて明瞭でないものがあり、さらに細かくみると、「永」の字に「永」、「永」の2種類に分けられ、さらに裏に「文」が鏤刻されているものが1枚、5号土塙より出土している。これらの資料により、「寛永通寶」は少なくとも4~5回鑄造し直されていることが伺える。

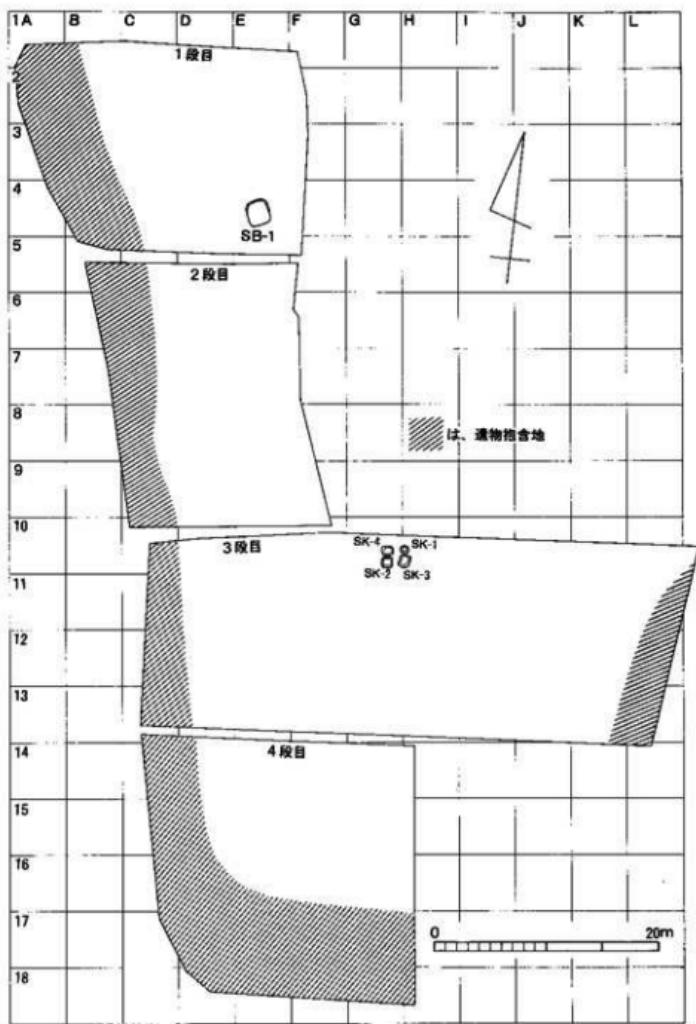
伴出した炭化物は、古銭といっしょに埋納されたものであり、穀物が炭化した物と思われる。

4号土塙は、その規模、形態等から井戸と思われる。

遺跡の大半を占める黒褐色土層域は、粘性を持つ土であるため、沼、堤の底であったのかもしれない。そこに取り付けられているのが溝（SD-1）であり、用水路の役目を持っていたのであろう。

# 当町遺跡





第31図 当町遺跡全体測量図 (1/500)

## 第Ⅲ章 当町遺跡

### I 概 要

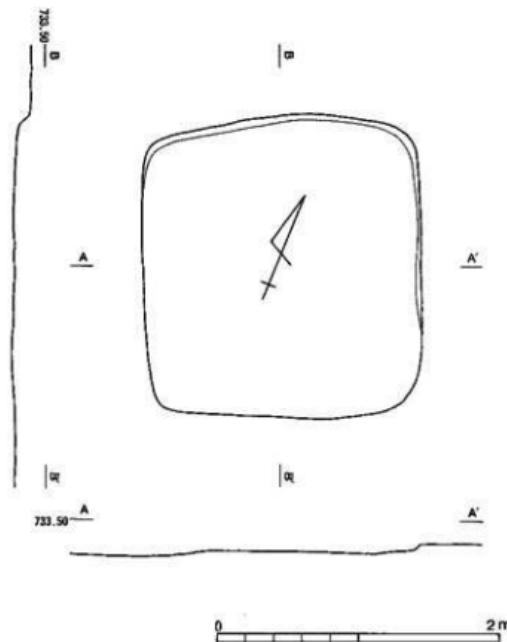
当町遺跡は南北に延びる舌状台地上に立地し、現状は水田となっている。この水田造成によって、高い所にあった遺構は、すべて破壊されており、この中に未開墾のマウンド残っていた。現水田とマウンドとの比高差は約1mほどあり、この高さが旧地形の高さと思われる。

出土した土器は、この高い所から削り取られた土といっしょに、低い所に持ち込まれたものと思われる。

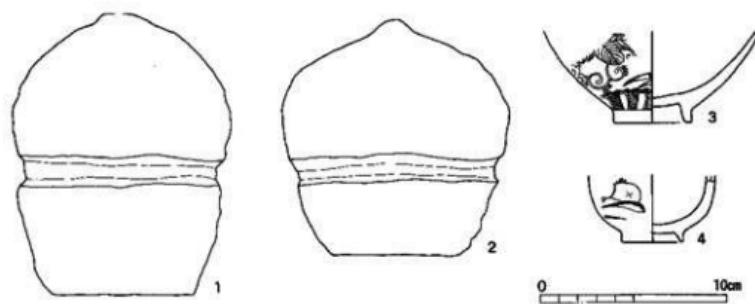
### II 住 居 址

#### 1. 第1号住居址

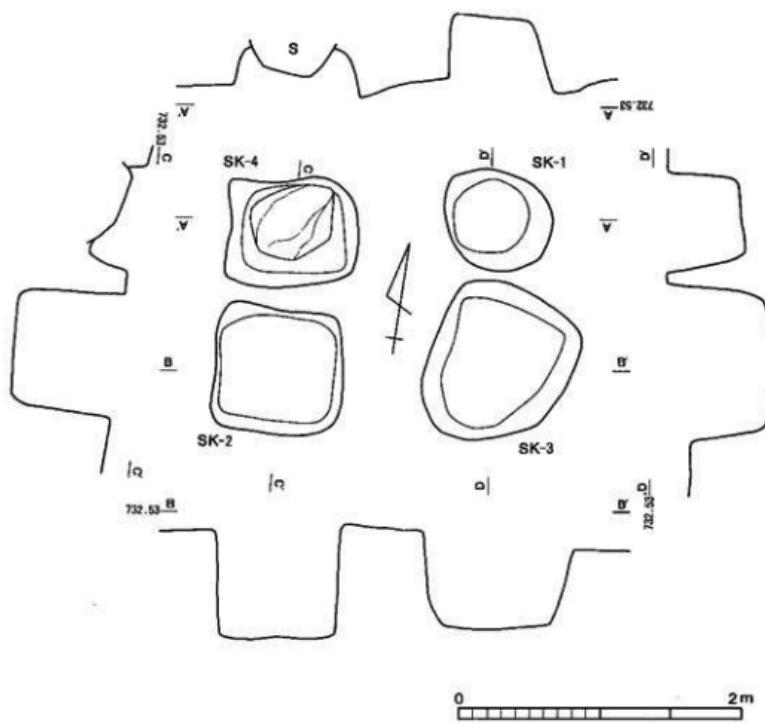
F—4グリッド。  
遺構の遺存状態は比  
常に悪く、床面の状  
況によって判断せざ  
るをえなかった。平  
面プランは隅丸方形  
を呈し、東西2m×  
南北2.1m×壁高は  
高い所で8cm、低い  
所では遺構確認と同  
一であった。床面は  
ローム面を平坦に整  
形し、比較的硬くし  
まっていた。遺物は  
伴出してないため  
時期は不明である。



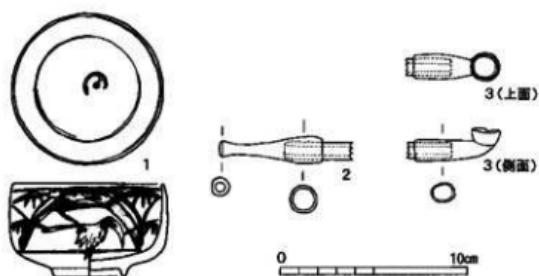
第32図 1号住居址実測図 (1/40)



第33図 マウンド出土遺物実測図 (1 / 3)



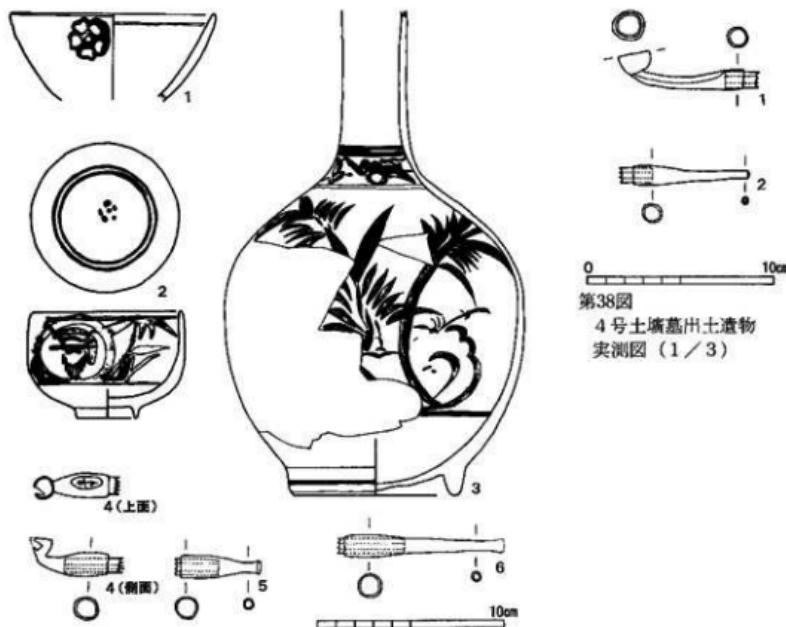
第34図 土壙墓実測図 (1 / 40)



第35図 1号土壤墓出土遺物実測図 (1/3)



第36図  
2号土壤墓出土遺物  
実測図 (1/3)



第37図 3号土壤墓出土遺物実測図 (1/3)



第39図 土壤墓出土古錢拓影 (2/3) 1-1号・2-2号・3,4-3号・5-4号

### III マウンド

G・H-10、遺跡内の北東に位置し東西3.4m、南北2.5m、高さ1mを測り、楕円形を呈する。このマウンドは、水田造成前の旧地形を表わすと思われ、調査において掘り下げた所、石垣の基礎と思われる石列が東側半分から確認されたが、西側からは検出されなかった。

この基礎石は、水田造成時にマウンドとの区分をするために作られたものと思われるが、その後土砂の流れ込み等により不明となり、現在では一部が水田となっていた。遺構確認面となるローム層まで掘り下げた所、土壤墓が4基確認され、墓域であることが判明した。このマウンドより、五輪塔の宝珠・陶磁器片が出土している。

#### 遺物

1. 五輪塔の空風輪であり、底径7.5cm、高さ15.1cm、最大径11.7cmを測り、石材は安山岩である。底部は若干くぼみ、頭部はとがっている。 2. 五輪塔の空風輪であり、序径6.7cm、高さ12.6cm、最大径12.2cmを測り、石材は安山岩である。底部は若干くぼみ、頭頂部がとがっている。 3. 茶碗は、高台径4cm、残欠高4.9cmを測り、器形は外傾していく。外面には花葉文が描かれている。 4. 湯呑は、高台径3cm、残欠高3.6cmを測り、器形は直立している。外面には花葉文が描かれている。

### IV 土 壤 墓

マウンドの下部遺構として4基まとまって検出されたが、西の一部分は水田となっていた。

#### 1. 1号土壙墓

4基確認された中で北東に位置する。平面プランは東西0.8m×南北0.7mの楕円形を呈し、深さは55cmを測る。遺構中より出土した遺物は湯呑1個、煙管1対、古銭6枚である。

#### 遺物

1. 湯呑は、口径8cm、器高5cm、高台径4cmを測り、器形は直立している。外面には模文、内面には線文が描かれている。 2. 煙管の吸口部で材質は銅である。ラウがつく肩の部分の直径1.3cm、吸口の直径9mm、長さ5.5cmを測る。 3. 煙管の雁首で材質は銅である。ラウがつく肩の部分の直径1.2cm、火皿の直径1.6cm、長さ4.6cmを測り、火皿内面に厚さ1mmの炭化物が付着し、たばこのヤニであろう。古銭はすべて「寛永通寶」と思われるが、1枚は分離しているが、残りの5枚は密着しており、切り離すことができない。2と3の煙管は、同一個体と思われる。

## 2. 2号土壙墓

4基の中の南西に位置する。平面プランは東西0.9m×南北0.9mの方形を呈し、深さは遺構確認面より80cmを測る。出土遺物は湯呑1個。古銭1枚である。

### 遺 物

1. 湯呑は、口径7cm、器高6cm、高台径3.4cmを測り、器形はほぼ直立している。染付は外面のみであり、雁と舟頭が描かれている。出土古銭は「寛永通寶」である。

## 3. 3号土壙墓

4基の中で南東に位置する。平面プランは東西1.1m×南北1.15mのはば長方形を呈し、深さは遺構確認面より70cmを測る。出土遺物は湯呑2個、徳利1個、煙管2対、古銭9枚、被葬者の歯などである。

### 遺 物

1. 湯呑は、口径10.8cm、残欠高4.7cmを測り、器形は外傾している。外面には蓮根を輪切り状の文様、内面に線文が描かれている。 2. 湯呑であり、口径8cm、器高5.7cm、高台径3cmを測り、器形は直立している。外面には笠文、内面には線文が2周し、底に点文が6個、描かれている。 3. 口縁部と肩部の一部が欠損する徳利である。高台径8.4cm、残欠高26.9cm 肩部の最大径16cmを測る。外面には笠文が描かれている。 4. 煙管の雁首で材質は銅である。ラウがつく肩の直径は1cm、火皿の直径1.2cm、長さ4.2cmを測り、肩の部分に「寿」が陰刻され、火皿内面に厚さ1mmの炭化物が付着し、タバコのヤニと思われる。 5. 煙管の吸口部で材質は銅である。ラウがつく肩の直径は1.2cm、吸口の直径は7mm、長さ4.2cmを測る。 ラウの部分が欠損しているが4・5は対になると思われる。 6. 煙管の吸口で、ラウのつく肩の直径は1cm、吸口の残欠部の直径4mm、長さは残欠部まで6.2cmを測る。このほかに実測不可能な煙管の雁首が1個出土し、6と対になると思われる。

出土古銭はすべて「寛永通寶」と思われ、1号土壙と同様に古銭同士は密着している。その中には赤サビの付いたものがあり、鉄銭と思われるが分離できないため不明である。

出土した歯は腐蝕が進んでおり、エナメル質が残っているのみであった。

## 4. 4号土壙墓

4基の中で北西に位置する。平面プランは東西95cm×南北85cmの長方形を呈し、深さ35cmを測るが底部に石があり、これ以上掘れなかったものと思われる。出土遺物は、煙管1対と古銭6枚である。

## 遺 物

1. 煙管の雁首でラウのつく肩の直径は1cm、火皿の直径は1.7cm、長さ6.8cmを測り、火皿の内面に厚さ1mm程度の炭化物が付着し、タバコのヤニと思われる。火皿から肩の部分まで、喫煙後火種を叩き落す時のへこみがついている。2. 煙管の吸口部でラウのつく肩の直径は1cm、吸口の直径は推定で7mm、長さは8.5cmを測る。1と2は対になると思われる。

古銭はすべて「寛永通寶」と思われ、他の土墳墓と同様に密着し、周辺に赤サビが付着し鉄錢と思われる。

## V グリッド出土遺物

本遺跡において、遺構の確認調査中に多量の土器、石器が出土している。しかし、これらは遺構に伴うものではなく、水田造成時に削り取られた土といつしょに、埋められたものであろう。

### 1. 繩文時代の遺物

#### (1) 土 器

##### 第1類土器 (1・2)

1. A 3、羽状繩文 上帯LR・下帯RL。 2. 表採、細めの羽状繩文、上帯LR・下帯RL。

##### 第2類土器 (3・4)

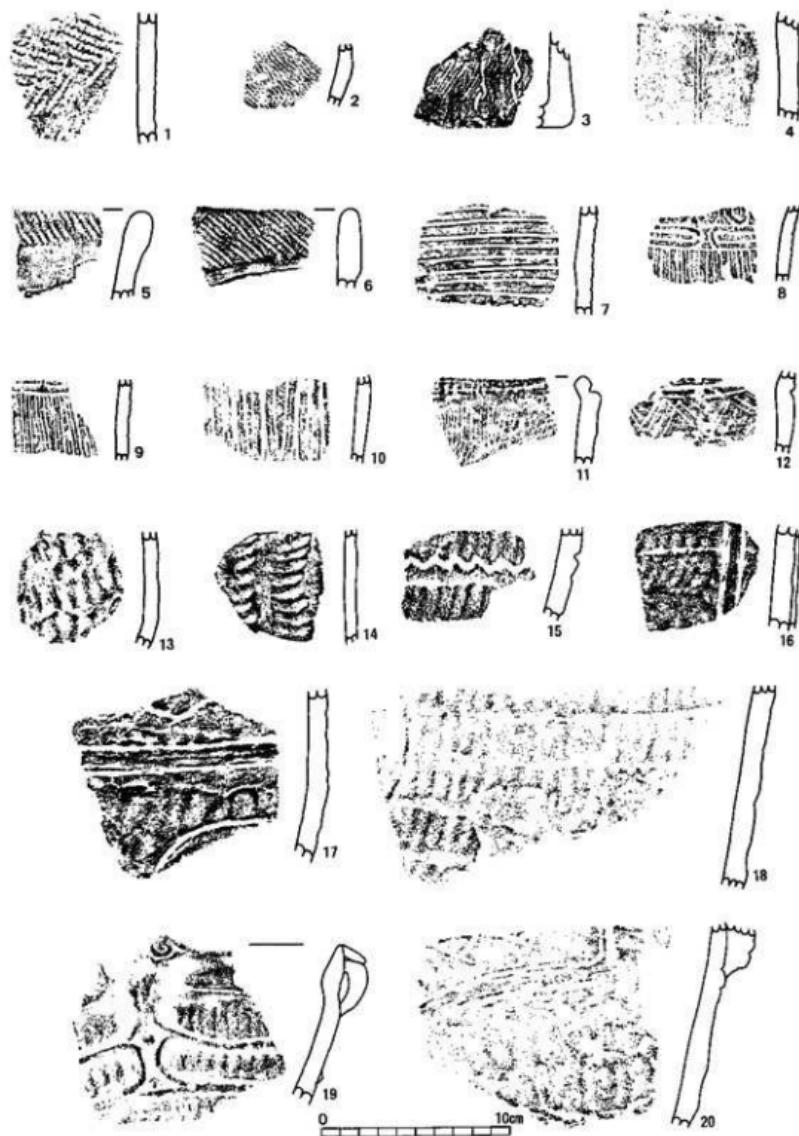
3. B 4、撚糸文LR。 4. B 3、撚糸文LRと鎌状工具による波線文。

##### 第3類土器 (5・6)

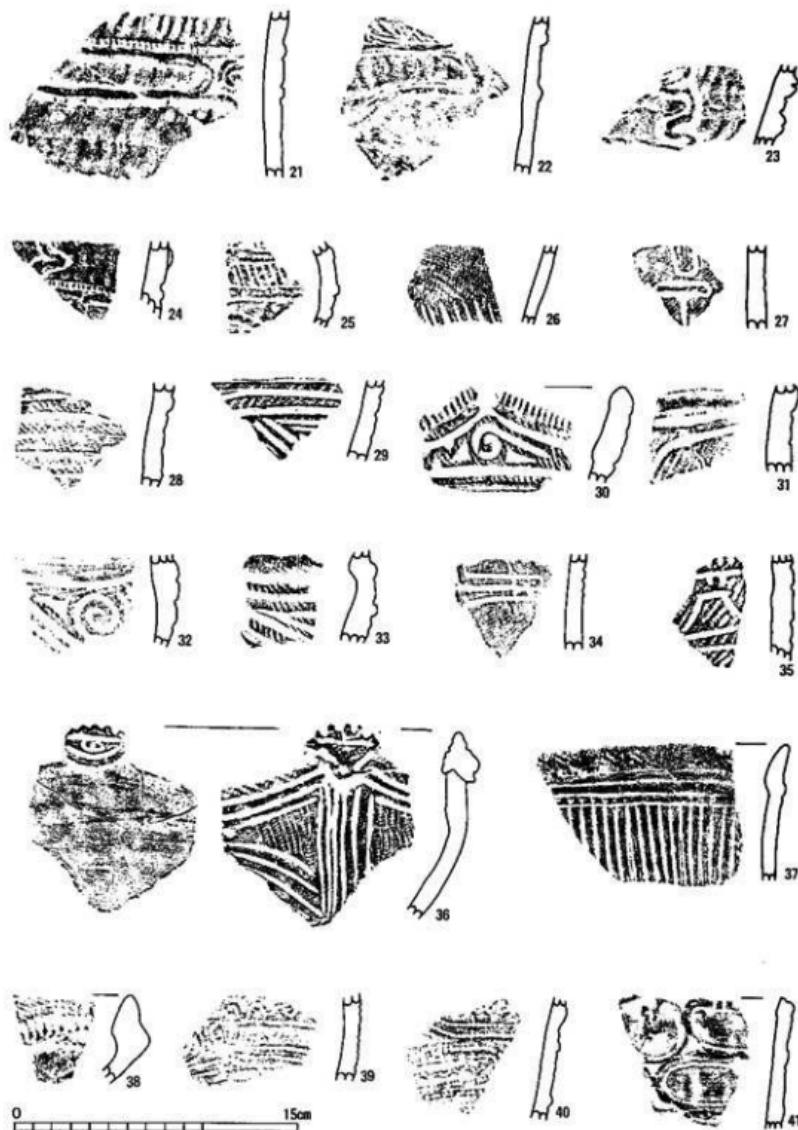
5. B 3、口縁部に1段の斜位の繩文RL。 6. B 3、口縁部に2段の斜位の繩文RL。

##### 第4類土器 (7~12)

7. B 2、棒状工具による横位の沈線文。 8. A 3、棒状工具による横位の区画沈線文と縱位の沈線文。 9. A 3、棒状工具による縦・横の沈線文。 10. B 2、棒状工具による縦位の区画沈線文中に斜位の沈線文。 11. 表採、口縁部に棒状工具による横位の沈線文とその下部に縦位の沈線文。 12. B 4、棒状工具による横位の沈線文の下に、交差する斜位の沈線文。



第40図 当町遺跡遺構外出土遺物（1／3）その1



第41図 当町遺跡遺構外出土遺物（1／3）その2



第42図 当町遺跡造構外出土遺物（1／3）その3



第43図 当町遺跡遺構外山上遺物 (1/3) その4



第44図 当町遺跡造構外出土遺物（1／3）その5

## 第5類土器 (13~25)

13. A 3、内面に横方向の磨きをし、外面は指頭圧痕。 14. A 3、内面は横方向の磨きと外  
面は縦方向の間隔を置いた指頭圧痕。 15. A 3、指頭圧痕があり、半截竹管による押引き蛇  
行沈線。 16. B 4、全面的に指頭圧痕、縦位に隆帯を貼り付け、両側に半截竹管による押引  
き。 17. B 4、指頭圧痕に隆帯を貼り付け、両側に棒状工具による直線と蛇行沈線文。 18. A 3、  
指頭圧痕に縦位の隆帯を貼り付け、両側に半截竹管による押引き。 19. B 4、口縁部に4単  
位の把手、頂上部に「の」の渦巻文、副部に隆帯による横位の区画文があり、両側に半截竹管  
による押引き、ほぼ全面に指頭圧痕。 20. A 3、指頭圧痕に隆帯による横位の区画をし、両  
側に半截竹管による押引き。ほぼ全面に指頭圧痕。 21. B 4、全面に指頭圧痕。隆帯による  
横位の区画があり、両側に半截竹管による押引き。隆帯による「の」の渦巻。 22. 表採、横  
位と蛇行する隆帯があり、両側に半截竹管による押引き。全面に指頭圧痕。 23. B 4、蛇行  
する隆帯の両側に沈線。指頭圧痕あり。 24. B 4、横位の押引きと、蛇行する隆帯の両側に  
沈線。指頭圧痕あり。 25. B 4、隆帯と沈線による横位の区画の中に斜めの沈線。指頭圧痕  
あり。

## 第6類土器 (26~38)

26. A 3、縄文 L R と棒状工具による縦位の沈線文。 27. A 2、縄文 L R と棒状工具による  
沈線文。 28. B 2、縄文 L R と棒状工具による横位の沈線文。 29. A 3、胎土に金雲母を含み、  
縄文 L R と棒状工具による沈線文。 30. B 3、波状口縁を呈し、口縁に中心に向かう籠状工  
具の沈線、脣部に半截竹管による沈線、胎土に金雲母を含む。 31. D 3、地文に縄文 L R を  
し、隆帯の両側に棒状工具による沈線文。胎土に金雲母を含む。 32. B 4、地文に縄文 L R  
をし、棒状工具による沈線文。 33. B 2、地文に縄文 L R をし、棒状工具による沈線文。  
34. A 3、地文に細めの縄文 R L をし、棒状工具による沈線文。 35. B 4、地文に縄文 L R  
をし、棒状工具による沈線文。胎土に金雲母を含む。 36. B 3、4単位の波状口縁を呈し、  
地文に縄文 L R をし、棒状工具による沈線文。波状上部に獸体文がつく。 37. A 3、口縁部  
に縄文 L R をし、下部に半截竹管による縦横の沈線。風化している。 38. B 4、波状口縁を  
呈し、口縁部に縄文 L R 、横位の隆帯に籠状工具による切れ目。

## 第7類土器 (39~56)

39. A 3、半截竹管による押引きで、横位の梢円形と蛇行波線文。 40. A 3、隆帯による横  
位の梢円形区画文中に、半截竹管による二重の押引きをし、その中に蛇行沈線。 41. B 3、  
隆帯による横位の梢円形区画文の内周にそって押引き、口縁部も同様。 42. A 3、隆帯によ  
る横位の梢円形区画文中に、半截竹管による二重の押引きをし、その中に1本ないし2本の蛇

行沈線。 43. B 4、口縁部に横と斜めの半截竹管文。隆帯による横位の楕円形区画文中に、三角形を基調とした押引き。 44. A 3、隆帯による横位の長方形区画文中に、竹管による直線と蛇行する押引き。 45. A 3、隆帯による横位の楕円形区画文中に、一重ないし二重の横位の竹管押引き。 46. A 3、隆帯による横位の楕円形区画文中に、竹管による交差・蛇行・縦の押引き。 47. A 3、隆帯による横位の長方形区画文中に、蛇行する竹管文。 48. B 3 隆帯による横位の楕円形区画文の中を、幅広の押引きが内周し、下には幅広の押引き。 49. B 4、隆帯による横位の楕円形区画文、その中に押引きが二周する。 50. B 4、隆帯による横位の楕円形区画文を押引きが一周する。 51. B 4、隆帯による横位の楕円形区画文の中を、押引きが内周にそって一周する。 52. B 3、隆帯による横位の区画文を、押引きが二周する。 53. B 2、隆帯による横位の長方形区画文の中を、縦の押引きで充填。 54. B 4、隆帯による横位の楕円形区画文の中を、斜めの押引き。風化している。 55. B 3、口縁部を四分割する縦位の隆帯があり、その中に竹管による押引きで横位の長方形に区画された中に、縦位の押引きを充填。 56. B 3、隆帯による横位の楕円形と長方形の区画文。

#### 第8類土器 (57~70)

57. A 3、押引きにより口縁部を四分割し、その間に箇状工具による三角形と沈線が組み合わせられている。 58. B 4、口縁部に爪形文と竹管による交互の刺突文と、棒状工具による沈線が引かれ、一定の間隔を置いて箇状工具による垂線。 59. A 3、沈線による横位の長方形区画文の中に、押引き文を充填。 60. A 3、四単位の波状口縁、上部は逆への字状にくぼみ、粘土紐が「の」の渦巻と「V」に貼り付けられている。 61. B 4、四単位の波状口縁に、箇状工具による沈線で、人面に似せて作られている。縁取りは棒状工具による沈線がつく。 62. B 3、四単位の波状口縁に押引きで、人面に似せて作られている。 63. B 3、四単位の波状口縁の頂上部に、箇状工具による沈線で人面に似ている把手がつく。 64. B 4、棒状工具による沈線が二本引かれ、間隔を置いて箇状工具による垂線が引かれている。 65. A 3、内面は横向方向に磨かれ、口縁部に箇状工具による三叉文があり、炭化物が付着している。外面は棒状工具による押引き。 66. C 4、棒状工具による交互の刺突文・沈線。箇状工具による三叉文。 67. A 2、口縁部に棒状工具による交互の刺突文・懸垂文。箇状工具による三叉文。 68. B 4、口縁部に棒状工具による押引きと箇状工具による三叉文。 69. B 3、口縁部に板状工具による沈線、棒状工具による沈線、押引き。その間に三叉文。 70. A 3、波状口縁を呈し、口縁部に爪形文と交互の刺突文。隆帯による渦巻の上に棒状工具による沈線。

#### 第9類土器 (71~77)

71. A 3、口縁を四分割する隆帯がつき、その間に押引きによる直線と渦巻。 72. B 12、口

縁に二本の押引きと「の」の沈線。 73. B 2、口縁に棒状工具による押引き。 74. B 3、口縁に棒状工具による二本の押引きと押引きによる十字文。全体的に風化している。

75. B 2、棒状工具による押引き。ボタン状の粘土貼付。胎土に金雲母を含む。 76. B 3、四単位の波状口縁を呈し、棒状工具による四本の押引き。 77. A 2、胎土に金雲母を含み、棒状工具による二本の押引きと逆U字・長方形。

#### 第10類土器 (78~87)

78. 表採、板状工具による縦の押引き。 79. A 2、板・棒状工具による押引き。蛇行沈線。 80. A 3、四単位の口縁部把手。81. B 4、棒状工具による、口縁部の沈線と押引き。 82. A 3、棒状工具による押引き。 83. B 3、棒状工具による押引き。 84. B 4、棒状工具による押引き。 85. B 4、口縁に二本づつの板状工具による押引きが三カ所にあり、その間を三角形を基調とした押引き。 86. B 4、内面を棒状工具の押引きにより円形と方形に区画。風化している。 87. A 3、内面は磨かれている。隆帯で楕円形に区画した中を、棒状工具による押引きを充填。隆帯にコブがつく。

#### 第11類土器 (88~91)

88. B 4、隆帯により区画された中を棒状工具による沈線がつく。 89. B 4、棒状工具による縦位と蛇行する押引き。 90. D 7、棒状工具による横位の押引き。 91. B 4、半截竹管による縦・横位の平行沈線。

#### 第12類土器 (92)

92. B 3、箇状工具による横位の沈線と棒状工具による刺突文。

#### 第13類土器 (93)

93. B 4、ボタン状の粘土が二個連結している。

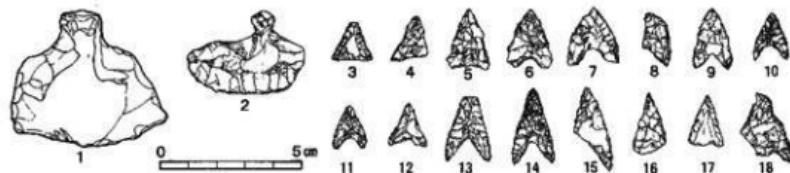
#### その他 (94~96)

94. A 4、頭部のみの出土。顔面は突出しており、両耳と後頭部にボタン状の粘土がつき、そこへ頭頂部から開けた穴が貫通する。 95. B 4、有孔跨付土器と思われる。 96. B 4、土鐘と思われる。

## (2) 石器

### 1. 石鏃 (第45図 3~18)

造構外から18点出土している。無茎鏃で基部に抉入のあるもの（凹基無茎鏃）が10点、基部が直線的なもの（平基無茎鏃）が4点、有茎鏃で基部に抉入のあるもの（凹基有茎鏃）が1点、破損しているものが3点である。これらのことから、中期の所産と考えてよいと思われる。



第45図 グリッド出土石匙・石鏃実測図 (1/2)

### 2. 石匙 (第45図 1・2)

2点出土し石材は、頁岩とチャートである。1は、(頁岩で撥形につくられ、著しく風化している。)2は、(チャートで横長につくられている。)

### 3. 打製石斧 (第46図 1~13)

13点出土し、撥形石斧(1)は1点、短冊形石斧型で、長軸の短いものが(2~6)が5点、いわゆる短冊形(7~10)が4点、それ以外は破損し識別はできない。使用されている石材は、粘板岩、ホルンフェルス、硬質の砂岩などである。

### 4. 磨石・凹石 (第46図 14・15)

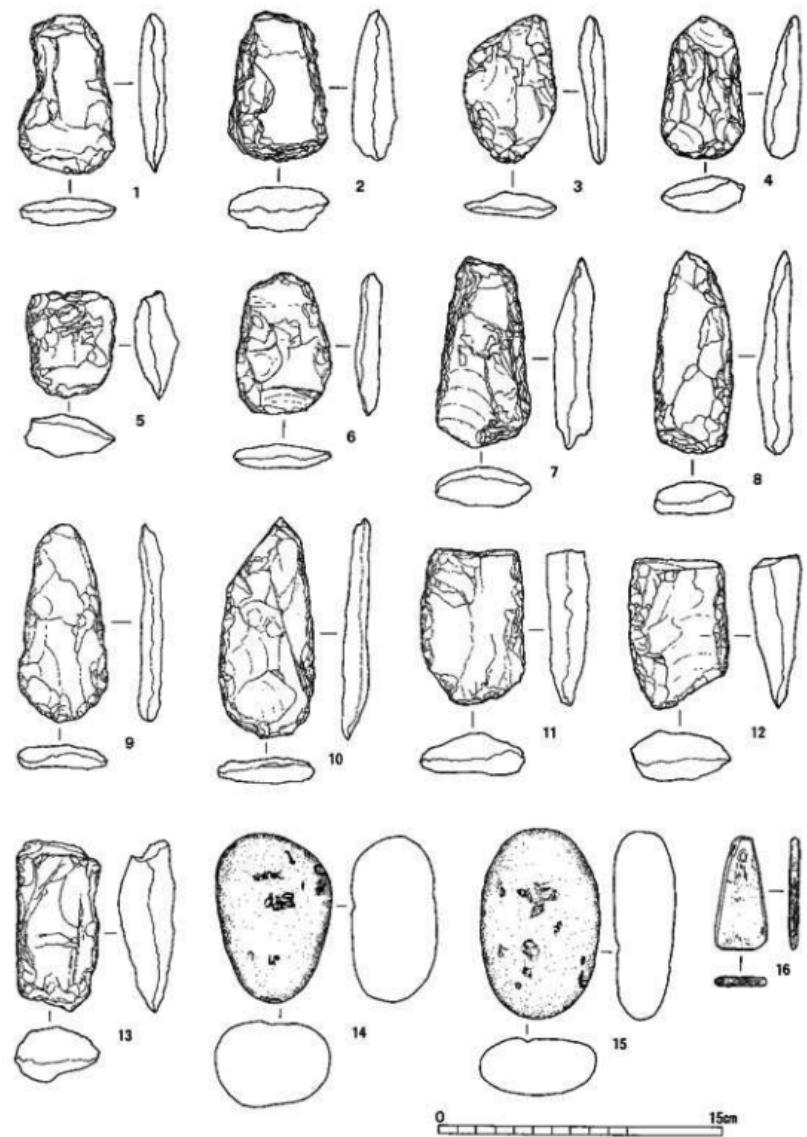
2点出土しているのみであり、形態的には磨石に近いと思われるが、2個体とも若干凹がついている。14、15とも遺跡周辺で採取が容易な安山岩である。

### 5. 磨製石斧 (第46図 16)

定角式であるが、刃は意識的につけていない。短軸の幅がせまい方に直径約4mmの穴が開けられており、周辺には同心円状の擦痕が見られる。石材は粘板岩であろう。

### 2. 弥生時代の遺物 (第47図 1~6)

6点出土し、1~4は6~11条の櫛描波状文が施こされ、5・6は、内外面とも横方向に磨



第46図 グリッド出土石器実測図 (1 / 3)

かれ、赤色顔料で彩色されている。胎土、焼成ともに良好である。

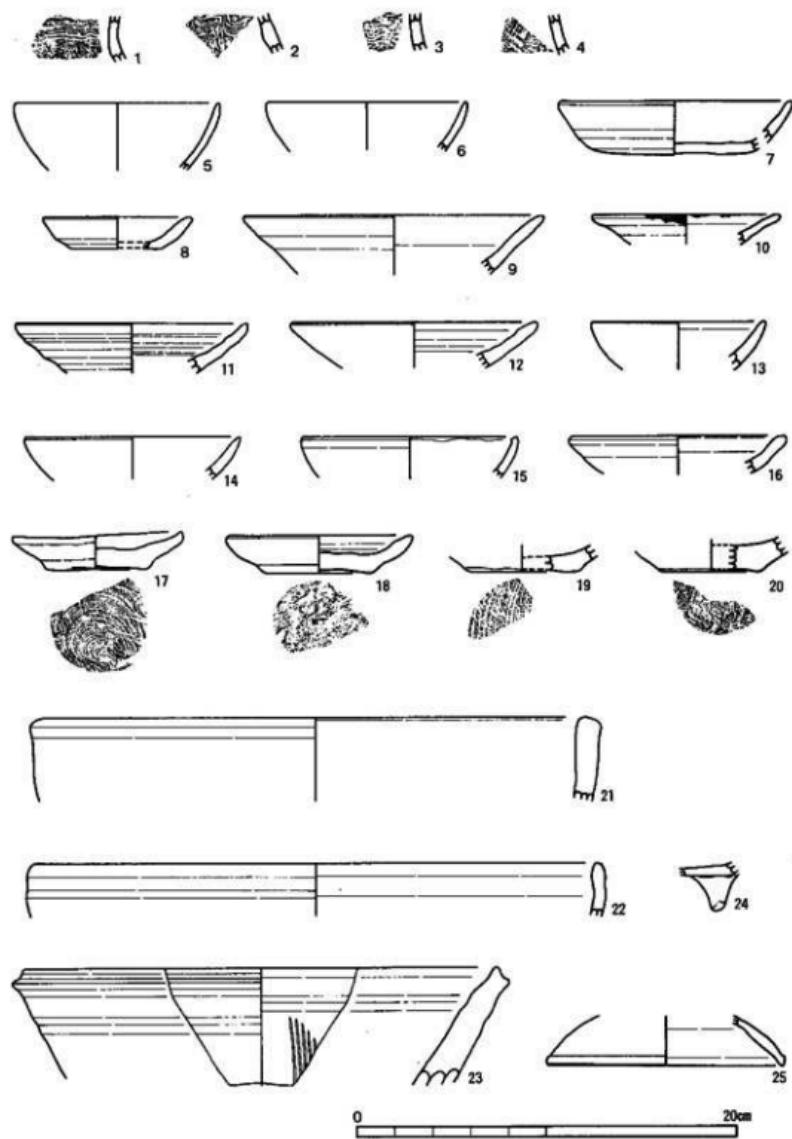
### 3. 中世の遺物

#### (1) 土師・土師質 (第47図 7~22)

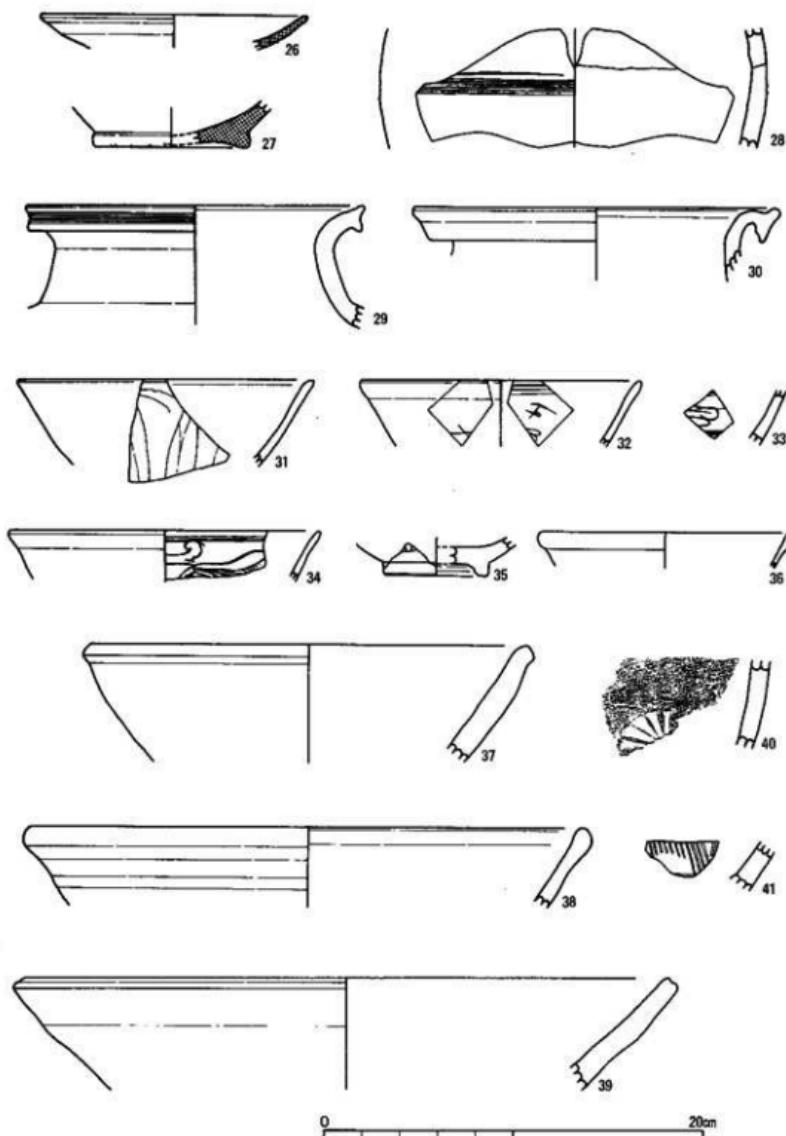
7. C 4、土師の皿であり、口径12cm、器高2.8cm、底径4.2cmを測る。内面は撫で整形、外面は横方向の臨整形、底部は未整形であり、凸凹している。胎土、焼成ともに良好である。
8. 表採、土師質の皿であり、口径7.6cm、器高1.7cm、底径4.7cmを測る。底部は回転糸切りのみであり、全体的にゆがんでいる。胎土、焼成ともに良好である。 9. 表採、土師質の坏であり、口径15.6cmを測る。内外面とも横ナデ整形である。胎土、焼成ともに良好である。
10. A 1、土師質の皿であり、口径9.6cmを測り、内外面とも横ナデであり、内面に煤が付着しており、灯明皿と思われる。胎土、焼成ともに良好である。 11. A 2、土師質の坏であり、口径12.6cmを測り、内外面とも横ナデであり、胎土、焼成ともに良好である。 12. B 2、土師質の坏であり、口径12.8cmを測り、内外面とも横ナデであり、胎土に金雲母を含む。胎土焼成ともに良好である。 13. B 4、土師質の坏であり、口径9cmを測り、内外面とも横ナデであり、胎土に金雲母を含む。胎土、焼成ともに良好である。 14. B 3、土師質の坏であり、口径11.2cmを測り、内外面とも横ナデであり、胎土に金雲母を含み、胎土、焼成ともに良好である。 15. 13C、土師質の坏であり、口径11.2cmを測り、内外面とも横ナデであり、胎土に金雲母を含み、胎土、焼成ともに良好である。口縁部に粘土のひずみがある。 16. 表採、土師質の坏であり、口径11cmを測り、内外面とも横ナデであり、胎土に金雲母を含む。内面に二次焼成を受け変質している。 17. 15D、土師質の皿であり、口径8.8cm、器高1.8cm、底径5.3cmを測り、内外面とも横ナデである。底部は回転糸切りのみであり、全体的にゆがんでいる。焼成は不良である。 18. B 1、土師質の皿であり、口径9.6cm、器高2cm、底径5.5cmを測り、粗雑な造りである。底部は回転糸切りのみであり、ひび割れやゆがみが生じている。焼成は不良である。 19. A 1、土師質の皿であり、口径5.6cmを測り、内外面とも横ナデであり、底部は回転糸切りのみである。胎土に金雲母を含み、胎土、焼成ともに良好である。
20. B 3、器形は不明であり、口径5.2cmを測り、内外面とも横ナデである。胎土、焼成ともに良好である。 21. C 15、内耳鍋であり、口径28.4cmを測り、内外面とも横ナデである。外面に煤が付着している。 22. A 1、口径29.5cmを測り、内外面とも横ナデである。器形は不明であるが、羽釜かもしれない。

#### (2) 瓦質 (第47図 23~25)

23. A 2、擂鉢と思われ、口径24.8cmを測り、胎土は精製され、金雲母を含んでいる。内面



第47図 グリッド出土弥生・土師質土器実測図（1／3）



第48図 グリッド出土陶・磁器実測図 (1 / 3)

に櫛齒状工具による5条の沈線。 24. 表採、香炉の脚部と思われ、脚高は1.9cmを測り、底部は回転糸切り後脚部を貼り付けている。 25. 表採、蓋と思われ、口径12.2cmを測り、内外面とも横ナデである。

### (3) 中世陶器 (第48図 26~30)

26. B 4、皿であり、口径13.8cmを測り、内外面ともに自然釉が付着している。 27. 表採器形は不明であり、高台径8cmを測り、底部は回転糸切り後貼り付け高台である。内面に自然釉が付着している。 28. 15D、三筋壺と思われ、三筋（一部四筋）の沈線があり、外面は自然釉が付着している。 29. B 3、臺であり、口径15.5cmを測り、内面は頭部上半部は自然釉、外面は頸部下半部に自然釉か付着している。 30. 壺であり、口径19cmを測り、残存部に釉薬はかかっていない。

### (4) 青 磁 (第48図 31~34)

31. C 2、碗であり、口径15.4cmを測り、蓮弁文であり釉薬は明青灰色である。 32. D 14、碗であり、口径14.6cmを測り、蓮弁文であり釉薬は茶緑灰色である。 33. B 3、碗であり、蓮弁文と思われ釉薬は明茶緑灰色である。 34. A 3、碗であり、口径16.2cmを測り、蓮弁文であり釉薬は茶緑灰色である。

## 4. 近世の遺物

### (1) 陶 器 (第48図 35~41)

35. D 14、茶碗であり、高台径5.3cmを測り、外面は鉄釉、内面は窯変釉している。天目茶碗と思われる。 36. B 4、碗であり、口径13cmを測り、無釉で黄白色である。 37. B 4、鉢と思われ、口径23.0cmを測り、黒灰色をしている。 38. B 3、鉢であり、口径29.0cmを測り、外面は灰白色をしている。 39. D 4、鉢であり、口径33.8cmを測り、上半分は内外面とも横ナデであり、下半分の外は叩き締めである。 40. D 16、鉢と思われ、外に菊花のスタンプ文がある。 41. B 3、摺鉢と思われ、内外面とも黒灰色である。

## VI 小 括

当町遺跡の調査によって、近世の土壤墓群を明らかにすることができた。それと共に、多量の繩文、弥生土器、中・近世陶磁器が出土している。

繩文土器は、中期前葉が主体であり、中部山岳地帯の編年によれば、梨久保・新道期に比定されよう。弥生土器は、わずか6片の小破片であるため時期は不明であるが、後期の所産と思われる。中世の磁器であるが、胎土、釉薬の色、蓮弁文などの状況から、12~13世紀の龍泉窯

系の所産と思われる。中世陶器として甕があり、12~13世紀の常滑大甕と思われる。近世陶器であるが、3号土壤より出土している箆文の徳利などから19世紀後半の所産と思われる。

これらのことなどから当町遺跡は、断続的ながら人々が住んでいた場所であろう。

## 第IV章 総括

### 1. 縄文時代の様相

#### a、遺構

本調査によって検出された遺構は、西原遺跡の住居址1軒のみである。住居址はローム層を掘り込んで存在するものの、明確な平面プランを把握することはできなかったが、埋甕・柱穴・炉の位置などから推測すると、長軸5.7m、短軸5.0mの楕円形を呈し、同一時代の住居址と比較すると大型の住居址である。

#### b、遺物

山梨県を含む中部山岳地帯の中後葉の土器の年代観については、曾利式の詳細古編年が組まれ、ほぼ完成をみている。この編年によって、当住居址の年代観を検討してみたい。

1は、五領ヶ台と思われ、本遺構に伴うものではないと思われる。2~17は、編年によればVIIになり、ほぼ完形の深鉢(11)が床直より出土しているため、この時期の遺構であろう。

18~23は、編年によればVIIIとなり、出土土器が破片化するため、流れ込みによる混入と思われる。

#### C、グリッド出土遺物

グリッドより出土した遺物は、中期のものがほとんどであり、若干後期が含まれる。

西原遺跡より出土した遺物は、中期前葉から後期後葉までの遺物と思われる。第1号住居址からは、定形小型磨製石斧が1点出土し、使用痕が若干見受けられる。当町遺跡より出土した磨斧は、特殊な形態を示すため装飾用品であろう。

### 2. 弥生時代の様相

#### a、遺物

前述したように遺物のみであるため、詳細には判断できないが、長坂町の柳坪遺跡から弥生時代中期初頭の住居址が1軒、高根町小池の舟山遺跡から弥生時代中期の土器が出土しており標高、地理的条件等からほぼこの時期に比定されよう。

### 3. 平安時代の様相

#### a、遺構

検出された住居址は2軒のみであるが、いづれも完掘できず、カマドを伴うものは1軒のみであった。いづれも一辺4m前後の隅丸方形を呈する住居址であろう。

#### b、遺物

山梨県において平安時代の土師器の年代観については、坂本・末木・堀内氏による詳細な編年が組まれ、ほぼ完成している。

この編年によって当住居址の年代観を検討してみたい。基本とするものは遺構中よりほぼ完形で出土したもの、それがない場合はカマド中のものを使用した。

I期 第3号住居址 9世紀後半

II期 第2号住居址 10世紀後半

と思われるが、2号住居址の場合は、カマドおよびほぼ完形品も出土していないため、一番新しい時期を採用した。

グリッド内から出土した土師器は、8世紀後半から10世紀前半までのものであり、近隣にこの時期の集落が存在すると思われる。

### C、黒書土器

出土した土器は「五」の一点のみであり、ほぼ完形でふせた状況で出土し、時期は9世紀第3四半期であった。

### 4. 中世の様相

#### a、遺物

当町遺跡より出土している土師質及び中世陶磁器は、12~13世紀の所産と思われ、輸入青磁が混入していたが、具体的な遺構は検出できなかった。しかしながら、当時貴重品であった青磁が出土したことにより、付近一帯に中世の城、館跡が存在すると思われる。

### 5. 近世の様相

#### a、遺構

検出された遺構は計6基であり、西原遺跡の土塙墓は単独、当町遺跡の土塙墓は集団と思わ

れる。西原遺跡の土壙墓には上部構造はなく、畠地となっており、忘れられた墓地であったが、当町遺跡の土壙墓は、上部構造がマウンド状になっており墓標こそなかったが、墓地として伝承されていた。この差は、墓地として形成された年代の差ではなかろうか。

### b、遺物

西原遺跡は古銭のみであり、当町遺跡は陶磁器・焼管・古銭などが出土している。古銭は、いづれも「寛永通寶」であり、材質としては青銅と鉄が存在した。青銅の初鋳年代は寛永3年（1626）であり、鉄銭の初鋳年代は文久2年（1862）である。西原遺跡の古銭はすべて青銅であり、中に一枚だけ文銭（初鋳年代寛文8年（1668））があり、当町遺跡より古いと思われる。

当町遺跡からは青銅と鉄が混ざって出土しており、比率としては鉄の方が多い。しかし、これらはサビで密着しており、切り離すのは不可能であった。近世陶磁器は瀬戸、美濃系と思われ、19世紀頃の所産と思われる。

西原と当町遺跡の遺構差は、被葬者の年齢・年代・性別・財力等と思われる。

### 6. その他の遺構

具体的に年代の不明なものが住居址1軒・土壙3基・性格不明遺構1基・溝1本があり、いづれも遺物が極端に少ないのである。

以上、西原・当町遺跡の遺構・遺物の性格、内容について若干の検討してきたが、十分な分析をなしたとは言いたいが、今後の研究の役にたてば幸いである。

最後に発掘調査及び遺物整理、本書作成に御協力、御指導をいただいた関係各位に対して、心より厚く感謝申し上げます。

### 引用・参考文献

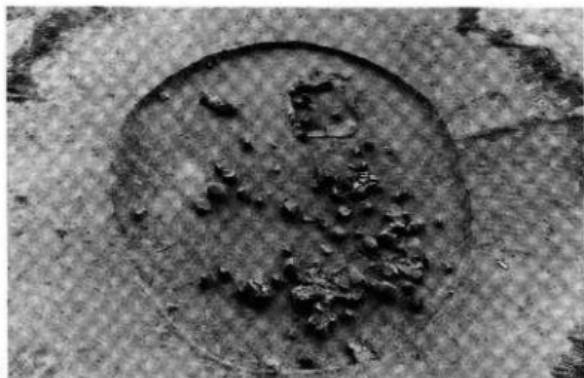
- |          |                |       |            |
|----------|----------------|-------|------------|
| 雨宮正樹     | 『東久保遺跡』        | 1984  | 高根町教育委員会   |
| 雨宮正樹     | 『旭東久保遺跡』       | 1985  | 高根町教育委員会   |
| 雨宮正樹     | 『町内遺跡分布調査』1987 |       | 高根町教育委員会   |
| 山路恭之助    | 『中屋城遺跡・塚山遺跡』   | 1984  | 須玉町教育委員会   |
| 米田明訓他    | 『柳坪遺跡』         | 1986  | 山梨県教育委員会   |
| 竹内理三編    | 角川日本地名大辞典 19   | 『山梨県』 | 1984 角川書店  |
| 神奈川考古同人会 | 『神奈川考古』14J     | 1983  | 神奈川考古同人会   |
| 神奈川考古同人会 | 『神奈川考古』21J     | 1986  | 神奈川考古同人会   |
| 山梨県考古学協会 | 『山梨県考古学協会誌』2J  | 1988  | 山梨県考古学協会   |
| 赤羽一郎     | 『常滑焼』23        | 1984  | ニュー・サイエンス社 |
| 林屋晴三     | 『古陶磁のみかた』      | 1983  | 第一法規       |
| 季刊考古学 13 | 『江戸時代を掘る』      | 1985  | 雄山閣出版      |

西原遺跡  
図版

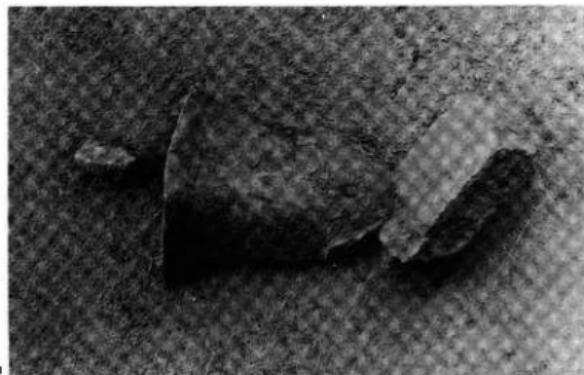


圖版  
2

第1号住居址  
遺物出土狀況



第1号住居址  
完形土器出土狀況

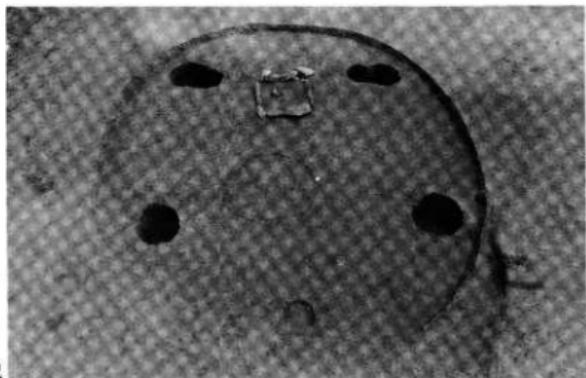


第1号住居址  
炉完掘状况



圖版  
3

第1号住居址  
完掘状况



第1号住居址内  
埋 壑

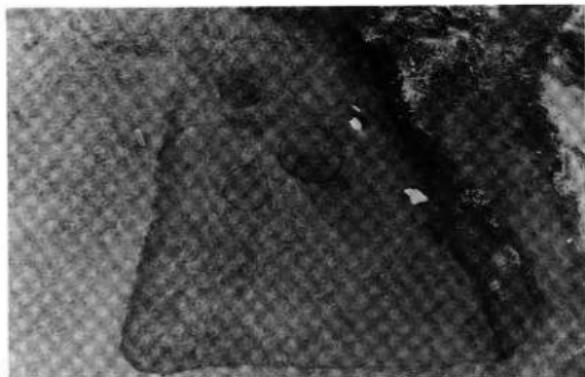


第2号住居址  
遺物出土状况



図版  
4

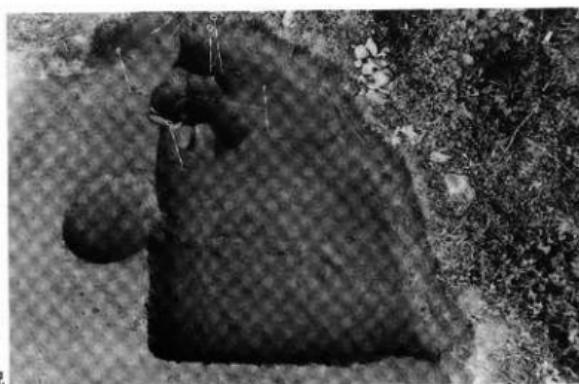
第2号住居址  
完掘状況



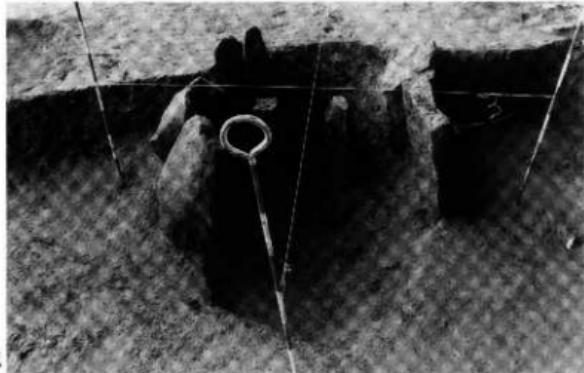
第3号住居址  
プラン確認状況



第3号住居址  
完掘状況



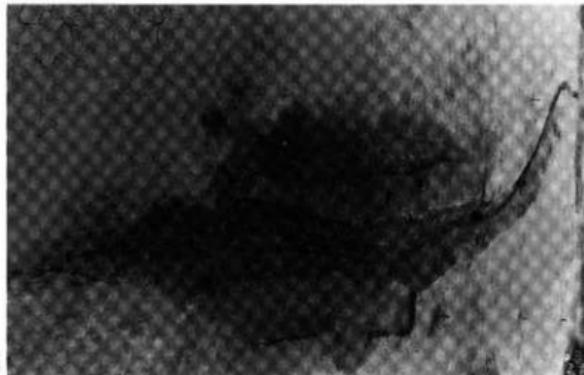
第3号住居址  
カマド完掘状況



S X - 1 完掘状況



第1号溝 完掘状況

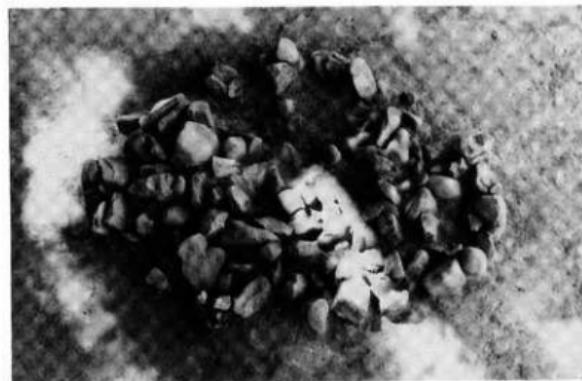


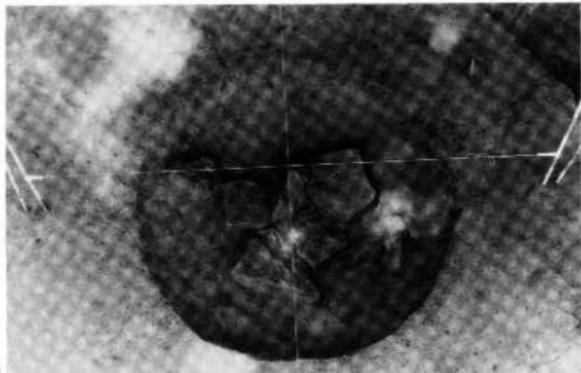
図版  
6

第1号土壌  
古錢出土状況

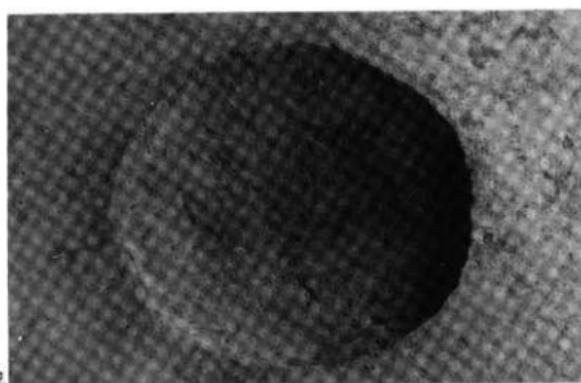


第1号土壌  
古錢クローズアップ

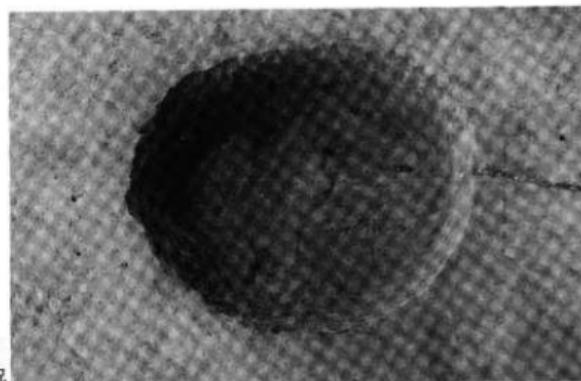




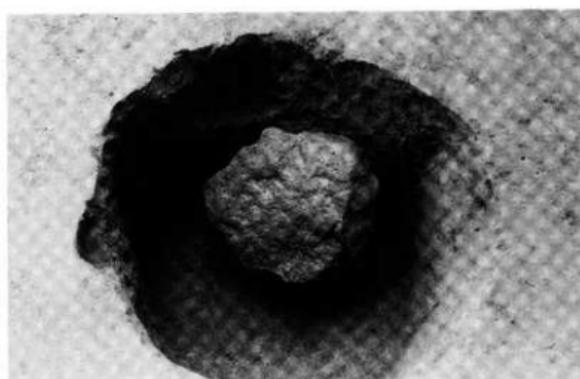
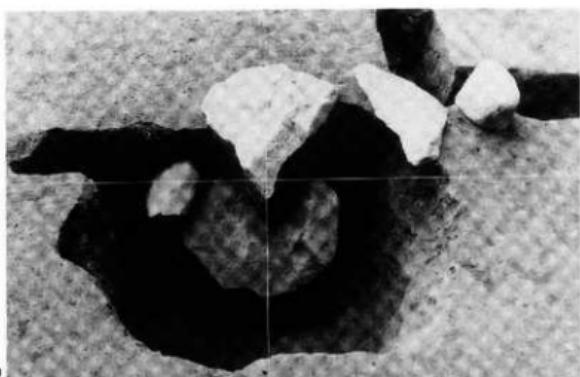
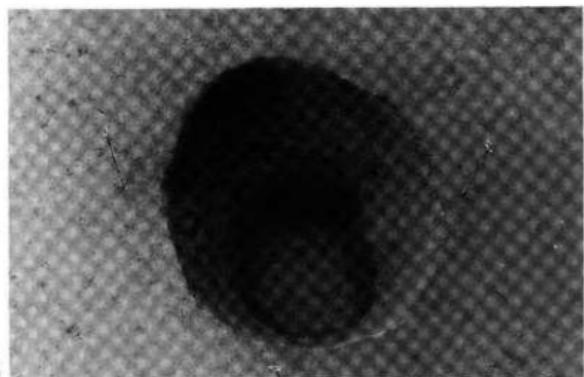
第2号土壤  
下部状况



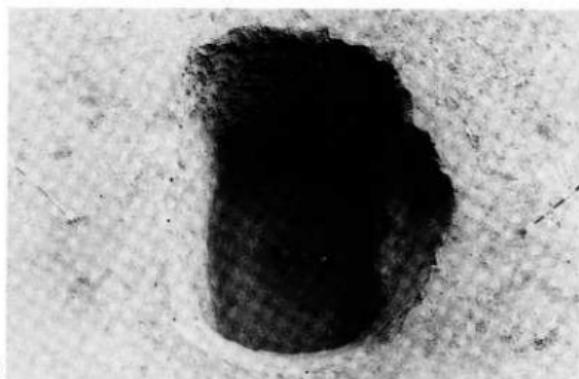
第2号土壤  
完掘状况



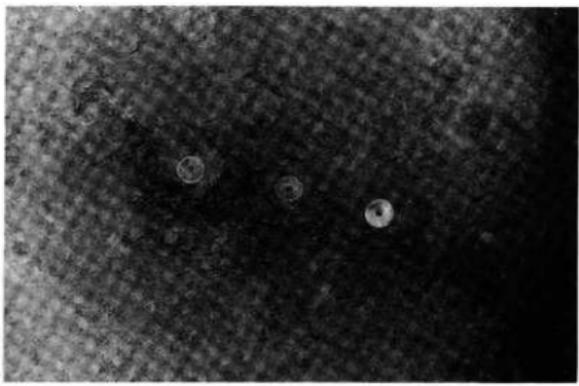
第3号土壤  
完掘状况



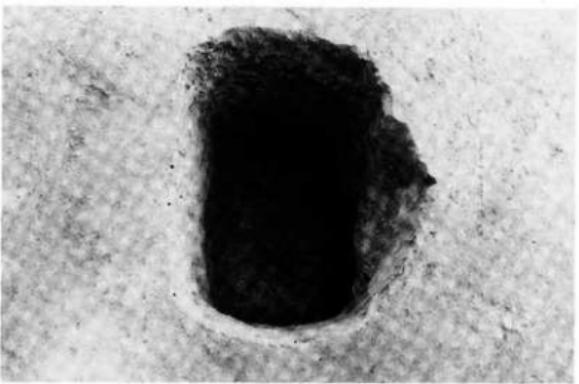
第5号土壤  
古錢出土状況



第5号土壤  
古錢クローズアップ

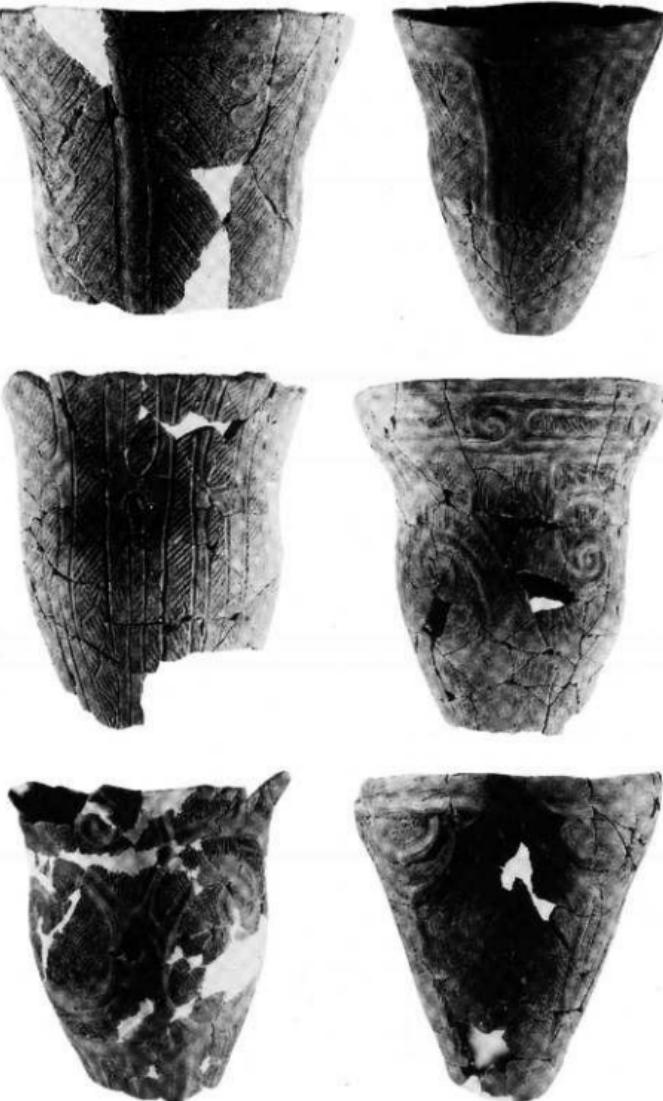


第5号土壤  
完掘状況



图版

10



第1号住居址出土遗物



第1号住居址出土遺物

圖版  
12



第2号住居址出土遺物



SX-1出土遺物



第3号住居址出土遺物



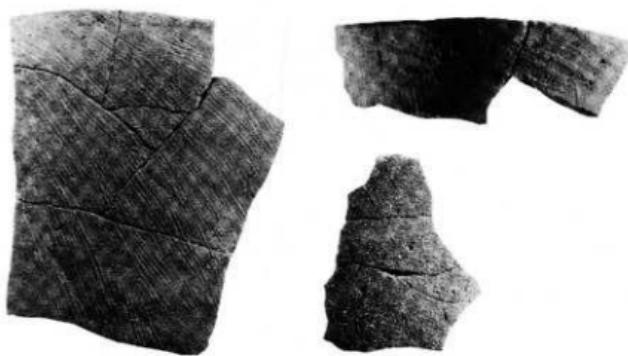
第1号土壤出土古錢



第5号土壤出土古錢



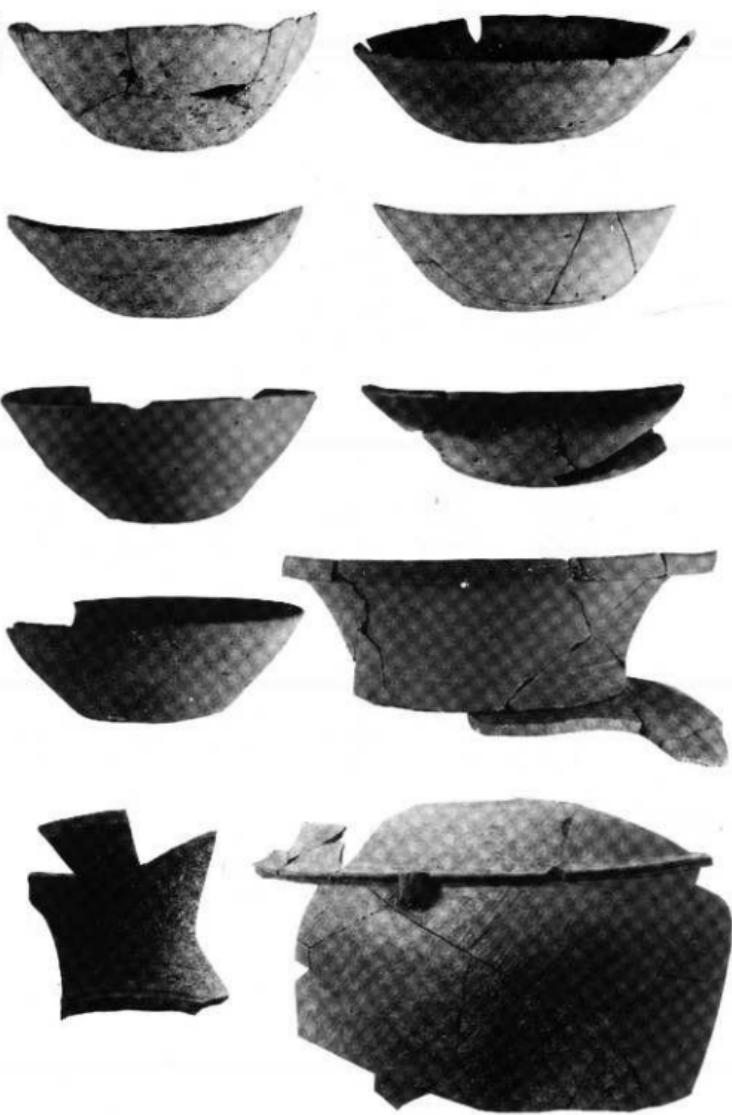
グリッド出土縄文土器



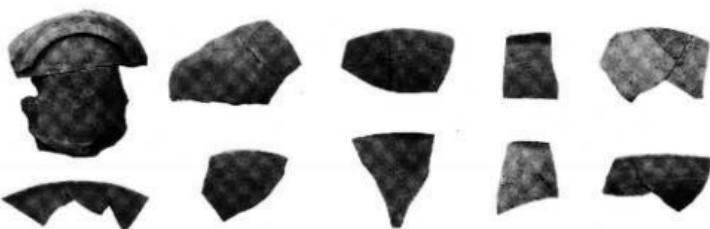
グリッド出土石器



グリッド出土縄文土器



グリッド出土 土師・須恵器



グリッド出土 土師・須恵器

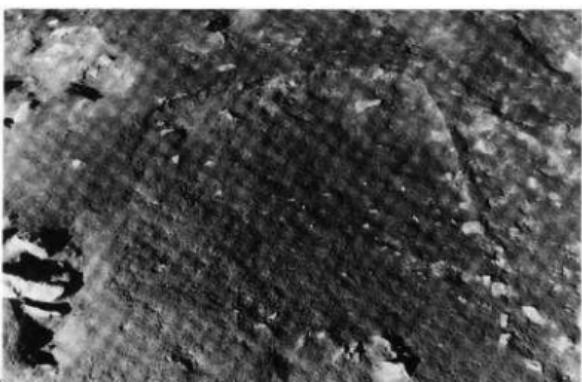


グリッド出土 近世陶磁器

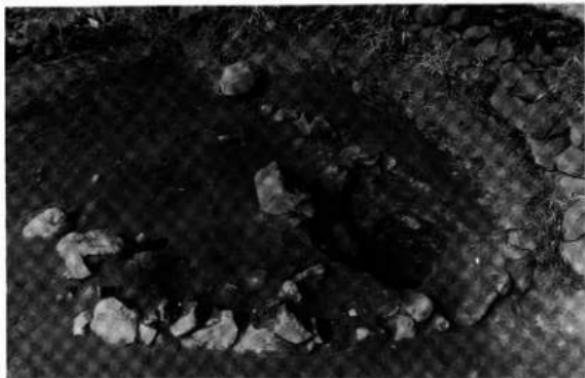


B2グリッド出土 鉄鎌

当町遺跡  
図版



第1号土壙墓  
及び石列



土壙墓群  
完掘状況

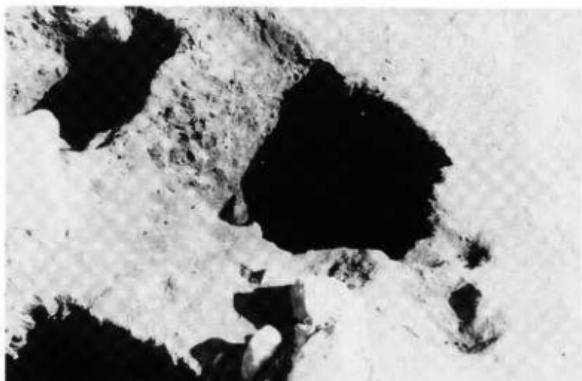


第1号土壙墓  
完掘状況

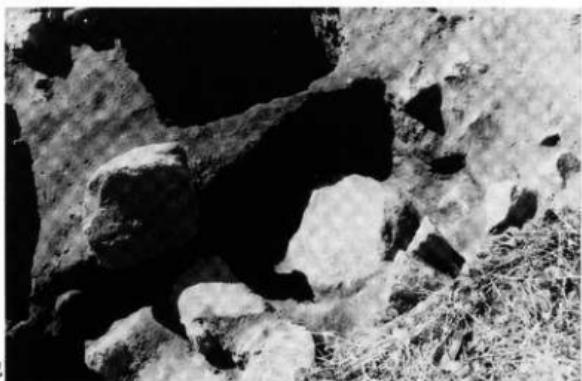




第2号土壤墓  
完掘状况



第3号土壤墓  
完掘状况



第4号土壤墓  
完掘状况



第1号土壤墓出土遗物



第2号土壤墓出土遗物



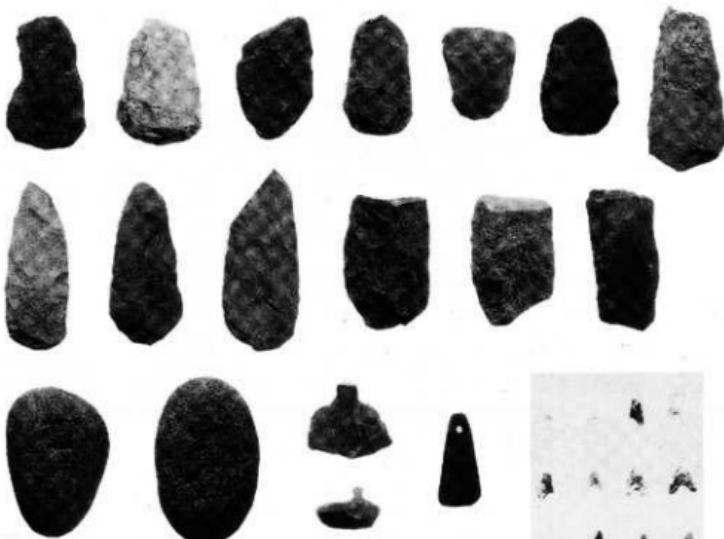
第3号土壤墓出土遗物



第4号土壤墓出土遗物



マウンド出土遺物



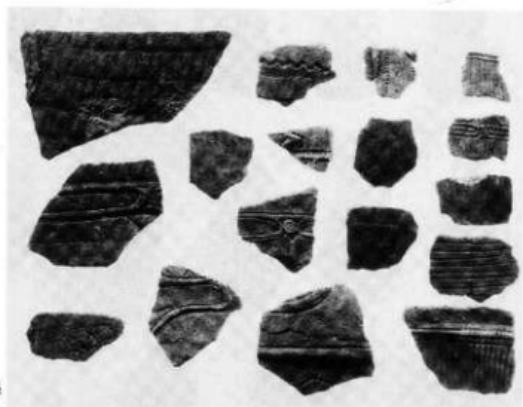
当町グリッド出土石器



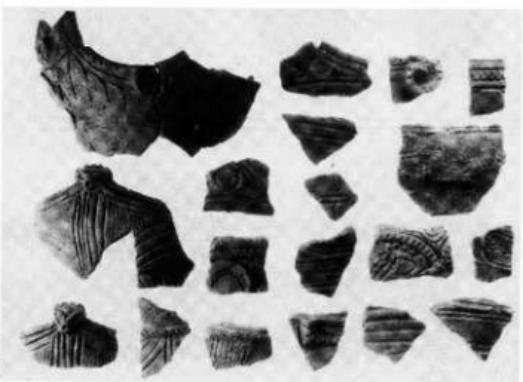
A 4 グリッド出土土偶



当町グリッド出土顔面把手



グリッド出土縄文土器



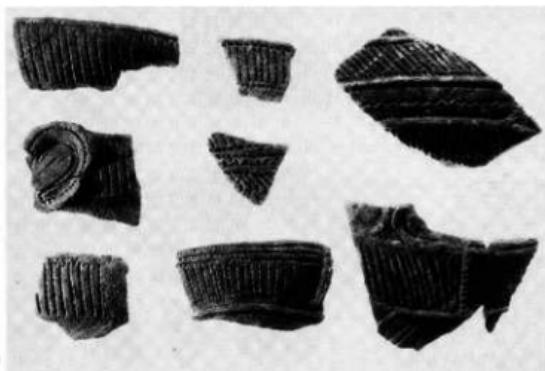
グリッド出土縄文土器



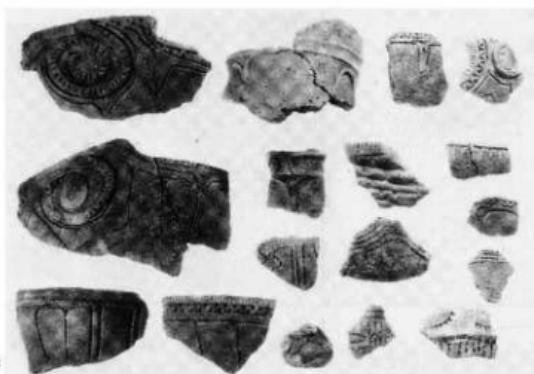
グリッド出土縄文土器



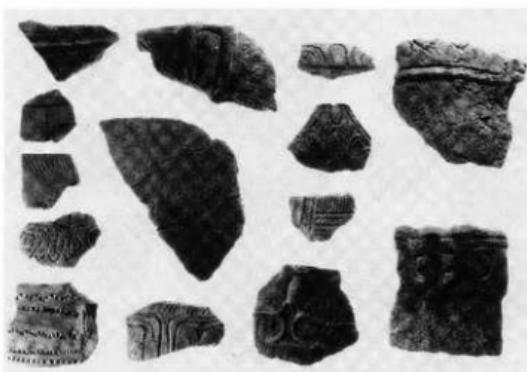
グリッド出土縄文土器



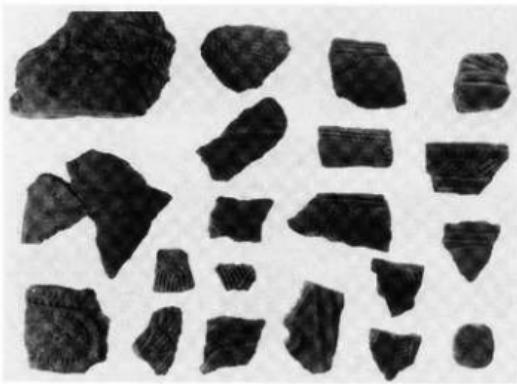
グリッド出土縄文土器



グリッド出土縄文土器



グリッド出土縄文土器



グリッド出土縄文土器



土師及び土師質



常 滑



青 磁



天目茶碗

陶 器 鉢

高根町埋蔵文化財 第6集  
昭和63年3月25日 印刷  
昭和63年3月31日 発行  
**西原遺跡・当町遺跡  
発掘調査報告書**  
発行所 高根町教育委員会  
印刷所 蛟北印刷株式会社

